



令和
6年度

HYOGO



ヒューマンライツ作品コンテスト 作品集

兵庫県・公益財団法人兵庫県人権啓発協会



発刊にあたって

兵庫県では人権尊重の理念に関して県民の理解を深めることにより、人権の尊重が社会の文化として定着し、県民みんながお互いを認め合いながら共に生きる「共生社会」の実現をめざして、家庭や学校、地域、職場等における人権教育及び啓発・研究を進めてきました。

近年は少子・高齢化、国際化、情報化の急速な進展、人々の価値観や生き方の多様化などに伴い、人権課題は、複雑化・多様化しています。特に、インターネットによる人権侵害、職場や学校でのハラスメント・いじめ等に加え、社会的養護を含めたこどもの人権、外国人や障害のある人、性的マイノリティの人権、性暴力の問題など、様々な人権課題が社会的関心を集めています。

兵庫県と（公財）兵庫県人権啓発協会では、日常生活の中で人権の尊重が文化として定着している社会をめざして「人権文化をすすめる県民運動」を市町と共に展開してきました。従来の「のじぎく文芸賞」は平成六年の第一回公募から昨年度までで、応募総数は二六、〇五五編となりました。いずれも、人の優しさや思いやり、支え合うことのすばらしさ、生命や人権の尊さ・大切さなどが綴られた力作ぞろいでした。今年度からは「HYOGOヒューマンライツ作品コンテスト」として文芸部門に加え動画・イラスト作品を公募し、その創作や鑑賞をとおして県民の皆さんに人権について主体的に考え、豊かな人権感覚を身につけていただくことを目的とした事業といたします。

ご応募いただいた作品の中で優秀なものについては、ひょうご人権ジャーナル「きずな」やラジオ番組等の広報媒体、啓発グッズによる人権啓発に活用して参ります。作品づくりをとおして育まれた人権尊重の心が県民の皆さんに広く発信され、人権文化の定着が一層図られることを期待しています。

本作品集には、本年度の応募作品の中から、最優秀賞四作品（文芸部門二、動画部門一、イラスト部門一）、優秀賞七作品（文芸部門四、動画部門二、イラスト部門二）を収録いたしました。県民の皆さまにご覧いただくと共に、人権啓発や研修の場でぜひ活用いただき、日常生活での実践につなげていただくことを願っています。

また、多数の作品について、慎重かつ厳正な審査をしていただきました審査委員の皆さまに、この場を借りて心よりお礼申し上げます。

最後になりましたが、今後とも「HYOGOヒューマンライツ作品コンテスト」をはじめ、さまざまな啓発事業などを実施し、県民の皆さまの人権意識の高揚や人権文化の創造に努めて参りたいと存じますので、どうぞよろしく願います。

令和六年十二月

兵 庫 県

公益財団法人兵庫県人権啓発協会

文芸部門

氏名

作品名

区分

〈創作分野〉

最優秀賞

優秀賞

佳作

山下洋

阿部忠彦

久保川
みゆ

山口 豊

藤本步希

池
本
ひ
な
た

カミングアウト

ともだち

一・五センチの命

価値を決めるのは誰

五年三組の木

お面の中は

(一般の部)

(学齡児童生徒の部)

〈随想分野〉

最優秀賞

優秀賞

佳作

鯖
読
駈

片岡 紘

田中幸典

迫田茉莉子

横田結椎

ボールペンの替え芯
＼ Y先生のこと ＼

地獄の底から
(一般の部)

きつと、次がある

正しく理解して差別をなくす
 ～アイヌの人々と和人の人々～

お手伝い

〈詩分野〉

優秀賞

佳作

ひな

こころおと

(学齡児童生徒の部)

黒田紀子
植野林檎
山本姫華

想像力のない翼は自由な空を飛べない
今を生きるあなたへ
ななめ前のあの子

動画部門

最優秀賞

優秀賞

チームR (県立伊丹北高等学校)

私の居場所

兵庫県立龍野高等学校放送部B班

(県立龍野高等学校)

偏見のない社会へ

佳作

チームS (県立伊丹北高等学校)

1つの勇氣

(県立龍野高等学校)

お互いを尊重できる未来へ

兵庫県立龍野高等学校放送部A班

その言葉

イラスト部門

最優秀賞

優秀賞

佳作

天文気象部 (県立舞子高等学校)

星空のもと、人類平等

山口美咲 (県立明石高等学校)

幸せと悲しみの共有

米山日桜莉 (県立兵庫工業高等学校)

手を取り合う動物たち

生柄美成 (県立明石高等学校)

どんなミライをえがく？

目次

【総評】	審査委員長 勝沼直子	1
------	------------	---

【文芸部門分野別審査講評】	各審査委員	2
---------------	-------	---

【創作分野】	カミングアウト	山下 洋	11
--------	---------	------	----

〈最優秀賞〉	ともだち	阿部 忠彦	27
--------	------	-------	----

〈優秀賞〉	一・五センチの命	久保川 みゆ	43
-------	----------	--------	----

【随想分野】	ボールペンの替え芯	読 駄	57
--------	-----------	-----	----

〈最優秀賞〉	＼＼先生のこと	片岡 紘	62
--------	---------	------	----

〈優秀賞〉	地獄の底から	片岡 紘	62
-------	--------	------	----

（一般の部）

【詩分野】

〈優秀賞〉

(学齡児童生徒の部)

ころおと ひ な 66

【動画部門】

〈最優秀賞〉

私の居場所 チーム R (県立伊丹北高等学校) 69

〈優秀賞〉

偏見のない社会へ 兵庫県立龍野高等学校放送部 B 班

(県立龍野高等学校) 69

〈優秀賞〉

1つの勇気 チーム S (県立伊丹北高等学校) 69

【イラスト部門】

〈最優秀賞〉

星空のもと、人類平等 : 天文気象部 (県立舞子高等学校) 70

〈優秀賞〉

幸せと悲しみの共有 山口 美咲 (県立明石高等学校) 70

◆令和六年度 HYOOGOヒューマンライツ作品コンテスト応募状況

合 計	学 齡 児 童 生 徒 (中 学 生 以 下)	一 般 (高 校 生 以 上)	文 芸 部 門	分 野
			創 作	随 想
13	5	8	7	詩
227	187	40	73	66
313	258	55	7	応募総数

高 校 生	動 画 部 門
5	学 校 数
13	作 品 数
13	応 募 総 数

高 校 生	イ ラ ス ト 部 門
5	学 校 数
75	作 品 数
75	応 募 総 数

◆令和六年度審査委員

- 勝沼 直子(総括)
- 時里 二郎(詩)
- 古卷 和芳(イラスト)
- 尾崎 美紀(創作)
- 山本 剛大(動画)
- 三浦 暁子(随想)
- 篠原 嘉一(動画)

総評

審査委員長 勝沼 直子

2024年は、人間の尊厳について考えさせられる大きな出来事がありました。

ほぼ半世紀にわたり障害や病気を「不良」とする旧優生保護法の下で行われた強制不妊手術を巡り最高裁は7月、国に被害者への賠償を命じました。政府と国会の責任を認め、謝罪と補償の仕組みを定めた新法が成立しましたが、手術を受けたことを周囲に知られたくない被害者も多く、自ら名乗り出るのは今も勇気がいることです。根深い差別意識をなくし、共に生きる社会を築く歩みは始まったばかりと言えます。

そして10月、ビッグニュースが飛び込んできました。日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）へのノーベル平和賞授与決定です。原爆投下から来年で80年となります。「核兵器のない世界」の実現に向けた長年の活動が世界に認められました。筆舌に尽くしがたい体験を、身を削るように語り続けてきたすべての被爆者に心からの敬意を表します。

残念なことに、世界に目を向ければ核廃絶への道は険しく、足元では被爆者が差別や偏見にさらされた歴史を消すことはできません。それでも彼らを支えたのは、証言に真剣に耳を傾け、共感し、ともに歩もうとする人々の存在だったでしょう。世代を超えてそのバトンをつないでいかなければ、と改めて思います。

「HYOGOヒューマンライツ作品コンテスト」は今回、文芸部門に動画、イラストを加えた3部門を初めて合同で審査しました。言葉を尽くさなければ描けない複雑な心の揺れ、短い映像に込める明確なメッセージ、1枚のイラストが呼び覚ます無限の想像力―。伝えたいことを届ける方法は一つではなく、多様な表現があるのだと感じます。

お届けする作品はどれも、学校や職場、家族関係など身の回りにある人権問題に気付き、当事者の尊厳を守るためにどんな表現ができるかを試行錯誤した証しです。その思いがどこかで誰かに届いて、生きる支えになってほしい。創作や表現の可能性を信じて、気付きと共感の輪を広げていきましょう。



文芸部門

【創作分野】

【随想分野】

【詩分野】

文芸部門分野別審査講評

【創作分野】

審査委員 尾崎 美紀

《審査総評》（一般の部と学齢児童生徒の部を含めて）

暮らしが複雑になるにつれ、凶悪な事件が起こってもすぐに忘れ去られる現代では、個人の苦しみや悩みはまるで塵のように吹き飛ばされてしまいます。そんな中で真剣に悩み、懸命に生きようとする人々のいることが、同じ苦しみを持つ者にとってどれほどの力になるか。今回の入賞作品は、それを再確認するテーマが多かった気がします。小さくて弱い一個の人間が、何かをきっかけにして再発する姿を描いた作品は、誰も否定できません。入選6作品には、作者の弱き者へのメッセージが込められていました。特に学齢児童生徒の部では、目の前の問題をしっかりと直視して、自分なりの生き方を見直す作品が多かった気がします。ただ、原稿用紙の使い方や会話文の入れ方など、基本的なことが疎かになっていた作品が多く残念でした。

〈最優秀賞〉（一般の部と学齢児童生徒の部を併せた全作品より）

作品名「カミングアウト」

硬質な文章で淡々とつづられた作品ですが、込められた思い、テーマはかなり重い物でした。人間関係を築くのが難しく、他人との違いに悩みその溝を埋められない主人公。「失感情症」という病名は初めて聞きました。なぜ笑うのか、なぜ泣くのか、なぜ怒るのか。そんな単純にも思える感情が理解できない。それがもて生きていくのが苦痛になった主人公は、ギリギリのところでも偶然出会った女性に救われます。しかし、そのたった一人の理解者を不幸にも事故で亡くした主人公は、

彼女のためにもそれでも後ろ向きにならず自分を見つめなおそうとします。鏡の中に現れる幻影を介して、かろうじて心のバランスをとる主人公は、窓を開け放して依存するだけでなく自分から立ち向かう道を選びます。人はいつでも何度でも生き直せる、と思わせる作品です。書出しの夜明けの描写は素晴らしいと思いました。

〈優秀賞〉（一般の部作品より）

作品名「ともだち」

中学生という、少し大人少し子どもという中途半端な中で、友だちを必死に守ろうとする主人公に大きな共感を覚えました。SNSでの悪意に満ちた書き込みや、根拠のないうわさ話に翻弄される現代社会に、小さいけれど一矢を報いた作品でもあります。10人のうち9人が黒と言っても、たった一人でも白と思ってくれる友だちがいたら、それは一人にも勝る味方です。ほんの些細な言動が巻き起こす事件、安易な一言が誤解を生んで心が折れてしまう人々。自分の意見だと勘違いして、十分に考えもせずに「いいね!」をつけてしまう人たちは、明日には自分がその側に立つことを予見できないのでしょうか。人は一人で生きていけない、とはよく言いますが、大勢の不透明な仲間が真の友だちなのか。最後の2行が生きています。

〈優秀賞〉（学齢児童生徒の部作品より）

作品名「一・五センチの命」

ユニークな発想の作品でした。アリを助け、新しい女王アリの棲み処を探す不思議な少女に出会ったことで、いじめに遭っていた主人公は引き寄せられるように行動を共にします。アリというちっぽけな生き物にも、それぞれに命があり、生きていく権利があると思わせる少女の行動は、目

の前のものしか見ない現代人への大きな警告かもしれません。少女がいったい何者だったのか。その正体にベールがかかったままですから、おそらく読者は少々消化不良な読後感を持つかもしれない。小学生という設定の少女が、年齢以上に饒舌なのが作品を説明的にしてしまったくらいがあります。改行を多くして、情景をイメージできるように工夫してみて下さい。

〈佳作〉（一般の部と学齢児童生徒の部を併せた全作品より）

作品名「価値を決めるのは誰」

人権ホームルームで生徒たちの心の底を覗いてしまった、講師である主人公の葛藤を描いた作品です。投げやりで消極的な生徒の言葉を聞き流してしまった後悔が、主人公を苦しめます。友人に投げかけられた「つまらない奴」という言葉に傷つき、自身の価値にも自信が持てなくなった主人公は、街角でサックスの音色に足を止めます。それはサックスが上手かったからというより、誰かに評価される前に自分が信じる価値を求めて街角に立ち続ける姿に心惹かれたからでした。変わっていく評価よりも、変わらない自分自身の価値が大切だということに気付かされたことで、後ろ向きだった生き方を変える決心をします。明日が来ることが待ち遠しいというささやかな喜びこそ、自分に向き合おうとする決心の表れなのでしょう。サックス奏者のセリフが少し説教じみているのが気になりました。

作品名「五年三組の木」

新しい学年、新しいクラス、それは楽しみと共に不安が付きまといまいます。そこで担任が提案したのが「木を植えること」。その木はクラスの雰囲気で成長もするが枯れてしまうこともあると言います。主人公はクラスをよくするために、積極的に皆にやさしくします。すると木はどんどん成長

していきますが、ともだちたちの要求も徐々にエスカレートしていくのです。そして、なぜか木が枯れて……つまり、人に頼ってばかりのクラスではだめだという事に気付きます。支え合うという事は、頼る事ではなくお互いの長所で短所を補い合う事。それに気付いたとき、竜巻で木が倒れてしまうという事件が起こります。絶望した皆は、しかしもう一度心を一つにする決心をします。クラス、学校、職場、それぞれは立場も環境も違う人間の集まりです。諍い、誤解、拒絶など、ひとまとめにするにはたくさんさんの難題があります。それを辛抱強く解決していくこそが、「木を育てる」という事なのでしょう。

作品名「お面の中は」

魔人ノエルが叶えてくれる主人公の願いが、どれも今の子どもたちが直面している問題につながっていることが興味深い作品でした。「だれとでも仲良くなれること」「賢くなれること」「運動神経がよくなること」すべて自分自身のコンプレックスにつながっていることでしょうか。それをおこなえてくれるのが、ノエルのくれるお面。それをかぶるとたちまち自信满满になってしまう。しかし、魔法が解けると元の自分に戻ってしまった主人公が、苦労もなく「完璧な理想の自分」になれたことで、逆に毎日がつまらなくなってしまうのです。

転び、傷つき、何度も反省し、それで初めてかなえられたことこそがその人の成長につながる、という事を再考させられた作品でした。ただ、友人の望がノエルだった、という種明かしには説得力がない気がします。何かそれなりの布石が欲しいところです。テーマがユニークで興味深いだけに、その点が気になりました。

【随想分野】

審査委員 三浦 暁子

《審査総評》（一般の部と学齡児童生徒の部を含めて）

令和6年度HYOGOヒューマンライツ作品コンテストの本分野には、全体で227編の応募がありました。そのうち、一般の部が40編、学齡児童生徒の部が187編でした。

今年も、様々な分野のエピソードが綴られていました。オリンピックキヤーだったということもあり、スポーツにまつわる作品もありました。同時に、転職の悩みを吐露するなど多岐にわたるテーマが取り上げられていました。ヒューマンライツの問題は分野を選ばず、私たちの人生全般にかかわっているということでしょう。

素直な視点に快さを感じると同時に、時には斜めからの視線で、ヒューマンライツについて論じるのも大切なことだと思えます。混沌とした世界情勢のもと、私たちは毎日を深く考えながら生きていかねばなりません。数多くの作品から生き方のヒントを得たことを感謝しています。

〈最優秀賞〉（一般の部と学齡児童生徒の部を併せた全作品より）

作品名「ボールペンの替え芯 ヽY先生のこと」

便利な生活が身についてしまい、今さらボールペンの芯を交換する人は少ないのではないのでしょうか。わざわざそんなことをするより、新しいものを買った方が早いからです。ところが、会社の方針で経費節約が叫ばれたこともあり、作者は久しぶりに芯を交換する必要に迫られます。そのとき、ふと思いついた高校の先生の面影……。タイムスリップしたように高校生に戻った作者が見たものは？。過去を遡りながら、今の自分を見つめる良い作品でした。

〈優秀賞〉（一般の部作品より）

作品名「地獄の底から」

15歳で入学した高校を15歳で退学した作者。この作品は作者の苦しみを告白するところから始まります。けれども、父の助言もあり、20歳のとき別の高校に再入学します。そして、23歳になった今、とうとう次の3月で卒業予定だといえます。その間に味わった苦しみを正直に描きながらも、なんとかして未来を自分の手でつかみ取ろうとするものがきに似た努力に感動しました。人生はやり直せるのだと教わったような気がします。

〈佳作〉（一般の部と学齢児童生徒の部を併せた全作品より）

作品名「きつと、次がある」

作者は、長い間、つとめた職場を退職し、次の新しい職場に就職しました。前の職場で楽しく働いていただけに、次の職場になかなかなじめません。確かに65歳を過ぎて新しい仕事にチャレンジするのは苦労が多いことでしょう。けれども、作者はまた次の職場を探し、今度こそと自分を励ますのですが、うまくいきません。何度も失敗しながら、作者がたどりついた結論「きつと次がある」の言葉に励まされました。

作品名「正しく理解して、差別をなくす（アイヌの人々と和人の人々）」

北海道の先住民族であるアイヌの人々について、深く考え、思いをまとめた作品です。授業で習ったことを自分なりに解釈し、考え込む姿勢にひかれました。うわべだけわかったふりをするのではなく、「もし自分がその立場だったら」とか「今日からここは私の家だからでいいけ」と言われたらどうするかなど、アイヌの人々の立場になってみることは、大切なことでしょう。

作品名「お手伝い」

おじいちゃんが救急車で病院に運ばれた時から、急変する家族の様子がリズムがある文章で描かれています。いつもお母さんがしている仕事を突如、家族で分担しなければなりません。けれども、家族は頑張りました。家族で力を合わせる姿を具体的に描くことによつて、読み手にその大変さとひたむきさがしみこんできます。そして、迎える幸福な結末が私たちの心に家族のあたたかさを教えてくれました。

【詩分野】

審査委員 時里 二郎

《審査総評》（一般の部と学齢児童生徒の部を含めて）

最優秀作と一般部門の優秀作の候補作をなしました。

特に、一般部門の作品については、東日本大震災による東京電力福島第二発電所の事故にともなう放射性物質の影響と見られる小児甲状腺がんの子どもたちの問題や、ネット社会が抱えているSNSの人権に関わる社会問題をどう解決していけばいいのかという提言は、確かに説得力があるのですが、「詩」という表現としては、物足りないものがあります。詩には、やはり言葉の音楽性（リズムも含めて）や言葉の組み立ての工夫や修辭的な整いが必要です。

学齢児童生徒の作品も、全体的に生き生きとした言葉の力を感じる作品が少なかったことが残念です。自分の身の回りの身近な生活を見つめることで、人の優しさや思いやりや、友だちとの支え合いといった体験や経験が見つかるはずです。期待しています。

〈優秀賞〉（学齡児童生徒の部より）

作品名「ころおと」

目には見えない心を、音（音楽）という比喩を使って表現しています。心にはさまざまな表情があつて、それは相手の心と響き合うことで心の和音となる。もちろん、響き合わないこともあります。そんなときでも、相手にも自分とは違う心の音があることを忘れまいというわけです。そこに相手を尊重し、お互いに支え合う気持が芽生え、一人一人を大切にする社会へとつながっていくようにしたいものです。

〈佳作〉（一般の部と学齡児童生徒の部を併せた全作品より）

作品名「想像力のない翼は自由な空を飛べない」

ネット社会の大きな人権問題になつていゝSNSでの心ない書き込みが、どんなに深く人を傷つけ、他者の人権を奪うことになつていゝかという問題をとりあげていゝます。作者は、それを想像力の欠如が原因していゝと説き、想像力を欠いた言葉の暴力性について強く主張していゝます。言葉には人に勇気を与える力があることにも言及し、どんな言葉を選ぶかは、それを使う人の想像力にかつていゝると訴えていゝます。底知れないネット社会の匿名性の暴力に潜む人権問題を強く喚起させる作品になつていゝます。ただ、この作品も「詩」というには、主張を述べることに強く傾いていゝきらいがあります。

作品名「今を生きるあなたへ」

これは、東日本大震災による東京電力福島第二発電所の事故にとまなう放射性物質の影響と見られる小児甲状腺がんの子どもたちの問題を捉えた作品です。その底流に流れていゝる生命や人権の尊

さを希求する強い思いが全編に溢れていて胸をうちます。ただ、それを表現するのに「詩」という形式が十分にいかされていないのが気になります。

作品名「ななめ前のあの子」

新学期が始まって、自分のななめ前の席はいつも空いています。心のうちでは気にはなっているのですが、自分からは何もできず、そのうちに学校にくると思っています。「その日から今までのあたり前が変わった」というのは少しわかりにくい表現ですが、おそらく先生から「ななめ前のあの子」についての話があったのでしょう。まだ自分では手をさしのべることはできないけれど、今までと違って、自分の心の中では、その席に「あの子」が座っているのが見えるということです。小さな変化ですが、そこに一人一人を大切にしようという思いや、人を思う優しさが育っているように思います。

《最優秀賞》

創作分野

カミングアウト

山下 洋

夜明け前の仄暗い遊歩道に響く、鈴の音、呼吸音、衣擦れの音、そして地面を蹴る音。邦人は、自らが奏でる音とリズムが、体の動きと、次第に調和していくのを感じていた。

邦人は更に走り続ける。空が白み始め、十二月の冷気が気にならなくなった頃、走っている自分を客観的に観ている、もう一人の自分の視点が現れた事に気付く。意識が、そこに傾くと、体は次第に無感覚になり、勝手に手足が動いているように思い始める。まるで夢の中にいる様な、心地良い浮遊感が、しば

らく続き、このまま永遠に、この時を過ごしていたいと思った直後、窪みに脚を取られ、バランスを崩し、はっと我に返る。邦人は体勢を立て直し、GPS機能の付いた腕時計を見る。いつもに比べ、かなり速いペースで走っていた事を確認する。しかし疲労感はなく感じていない。邦人は、先程の陶酔感は脳内麻薬が関係している「ランナーズハイ」と呼ばれる状態なのだと考えていた。以前にも何度か経験した事ではあったが、今日経験したそれは、これまでとは次元の違う、とても強いものだと感じていた。久しぶりに「マミ」が来るかもしれないと邦人は思った。彼女に「あの事」を話さないといけないと思うと、胸のあたりが、モヤモヤするのを感じた。

邦人はジョギングを終え、三階建ての自宅アパートの下で立ち止まり、深く大きな息を吐く。階段を上がっていくと、二階の踊り場で、丸くなっている黒猫と遭遇する。アパート周囲でよく見かける、その黒猫は、皮膚病

のせいなのか、所々体毛が抜け、地肌が透けて見える。頬にあるはずの髭も、ほとんど生えておらず、生気がなく、虚ろな目をしていた。黒猫と目が合った瞬間、その顔が気味の悪い笑みを浮かべた人の顔に変わっていく。ヤツらが来る気配を感じ、邦人は顔を背け、逃げるようにして三階まで駆け上がり、部屋に入って、手早く鍵を閉め、ドアチェーンを掛けて、溜め息をついた。

浴室に入った邦人は、シャワーで冷えた身体をひとしきり温めると、すつと立ち上がり今度は冷水で満たした浴槽に足をそろりりを入れ、上半身に力を込めながら、ゆっくりと震える身を沈めていく。温水シャワーと冷水浴を交互に数回繰り返すと、浴室から出て、バスタオルで水分を入念に拭きとる。減量中のボクサーのように引き締まった、邦人の裸体には、まだらに赤みが差している。

畳敷きの居室に戻った邦人は、下ろし立てのグレーの激安スウェットスーツを着込む。

部屋の隅の鏡に自分の姿を映す。短髪に不精髭、頬がこけ、左の眉に、子どもの頃の怪我で出来た傷跡のある、少し厳つい顔。『胸に番号があったら、塀の中の人、確定や』と、邦人は思った。

邦人は、部屋の深緑色の遮光カーテンを丁寧に閉めると、畳の上に寝そべり、ヨガのポーズやストレッチを交えながら全身を入念に整えていく。運動を終えた邦人は、鏡台の前に胡坐をかき、縦長の鏡を見据え、目を閉じて、一定のリズムで、大きな音のする呼吸法を繰り返す。時間が経過し、呼吸が静かになると、邦人の口元が動き始め、何か呟いているのが聞こえてくる。

「クニちゃん、元気？」

「マミ、今日も来てくれてありがとう」

「どうしたの？ また何かあった？」

「俺ら、結婚して、もう五年やな？」

「そう、明日は木婚式の『イブ』だね」

「木婚式って、みんな何するんやろ？」

「豪華なイタリアンでも食べて、夫から妻に感謝の気持ちを込めて、木に、ちなんだプレゼント渡すのが、定番じゃない？」

「ほんまかいな。何で夫から妻だけやねん。妻から夫へのプレゼントは無いんか？」

「そんなの、いっぱい迷惑かけた人から、その度に尻拭いさせられた人へ贈るのが当たり前でしょ？ だから、ネットのアンケートでも、夫婦の記念日の時は、夫から妻へ贈るプレゼントの割合の方が多いんだよ」

「俺、そんなにいっぱい、マミに迷惑かけてきたかな？」

「クニちゃん、本気で言ってるの？ 今までの事、全部忘れてしまったのかな？ まさか若年性の認知症にでもなった？」

「いや、マミ違うねん。今さらやけど、俺そういう事の自覚がほとんど無いねん。俺、人の気持ち、よう分からんねん」

「え？ クニちゃん、何言ってるの？」

「実は、他人の気持ちどころか、自分自身が何を感じてるのかも、ほとんど分かって無かったみたいやねん」

「ちよつと、クニちゃん、大丈夫？」

「この前、新しい薬を処方してもらうのに、クリニック行った時、医者から言われたんやけど、マミなあ、アレキシサイミアって聞いたことある？」

「え？ 急に何？」

「日本語やったら、感情を失う症状と書いて失感情症^クって言うねんけど」

「それって病気なの？」

「うん。精神疾患の一つの症状として現れる事もあるけど、生まれつきの性格みたいにな、先天的なケースもあるらしい。でもその場合は、生き辛さがストレスになって、後に精神疾患を発症する事が多いみたいやな」

「そういう人って珍しいの？」

「一説によると、十人に一人ぐらいが、その失感情症の傾向に当てはまるから、そんなに

珍しいものでもないって医者言うてた」

「そんなに多いの？」

「俺も数字に驚いたけど、俺みたいに長い間
気付かずにいる人が、ほとんどなんやろな」

「クニちゃんは、感情が無いの？」

「何も感情が無いわけじゃなくて、感情が起
きた時に、それが何の感情なのか、自分で区
別したり、表現するのが難しいねん」

「俺の場合やけど、何か心の変化が有りそう
な時、胸とか腹の中が、モヤモヤしたり、締
め付けられたり、何か普通では無いのは分か
るけど、それがどういう感情なのか、よう分
からん感じかな」

「そういえば、クニちゃん、変なところで笑っ
たり、怒ったりする事がよくあるけど、あれ
はもしかして、今の話と関係があるの？」

「実はそうやねん。俺が笑ったり、怒ったり
する時は、自然にそうしてる事は少なくて、
こういう場面では笑わなあかん、怒らなあか
んと、自分なりに想定してやってる事が、ほ

とんどかもしれない。だから、俺の本心から出
た自然な笑いや怒りじゃなくて、言ってみれ
ば嘘の芝居やねん。だから場違いと言われる
事が多いのかもしれないなあ」

「え、それは衝撃の告白じゃん」

「テレビドラマとか見てて、親しい人が死ん
だり、悲しい時に、役者が涙流して、泣くシー
ンが、よくあるやろ？俺、そういう事が理
解出来へん事がよくあるねん」

「え？ ちよつと、クニちゃん」

「俺、男手一つで高校出るまで育ててくれた
親父が、心筋梗塞で突然、逝った時も、全然
涙が出てこなかった。葬式の時も、まわりの
親戚達は泣いてるのに、俺だけが何もなかつ
たみたい。最後まで場違いに、無表情で通
してたと思う。笑うとか、怒るとかは、歳を
重ねて、ある程度、演技出来るようになった
けど、今でも、泣くのは無理やねん」

「クニちゃん、そうだったんだ」

「ママ、泣く時って、泣こうとして、泣くも

んなん？ それとも、勝手に涙が出てきて、みんな泣いてるん？」

「うん。なかなか泣こうとして泣ける人は少ないと思う。役者とかは別だけど。だから、やっぱり、自然に涙が出てきて、泣いている人が多いと思うよ」

「やっぱり、そうか。みんなは感情が湧いたら、すぐにそれを頭が理解して、自然に体が反応しているんやろな。俺の場合は、一般的に、悲しいことや、辛いと思われる事があった時、それは、後で頭の中で何となく理解は出来るけど、リアルタイムで警報器みたいな機能が、うまく作動してないと思うねん。でもその時、気付いてないだけで、心と体の傷は負っているみたいやから、後になって救急車で病院送りになるのが俺のパターンやな」

「そうだね。今まで何回、救急車呼んだか分からない。消防署の隣にでも、引越してたらよかったね」

先日、医者から、アレキシサイミアの傾向があると言われ、邦人は長年重くのしかかっていた肩の荷が少し下りたような気がした。

邦人が、他人に対して、漠然とした違和感のようなものを感じ始めたのは、中学生になった頃からだった。それまで親しかった友人達が、いつの間にか、邦人には、読み取れない複雑な表情を共有し始め、会話の中にも謎解きのような含みが込められているように、邦人は感じるようになった。邦人だけが、その状況を理解できずに蚊帳の外になる場面が進級するにつれ増えていき、次第にグループから孤立するようになった。

進学し就職し、歳を重ねても、他人との距離は縮まる事は無かった。そして人間関係を含め、この社会の仕組みが理解出来なくなり日常生活での失敗が多くなっていた。もっとと経験を積んで努力さえすれば、きっと全ての問題が解消されると信じ、自己啓発や心理学、対人関係に関する書物を読み漁り、怪し

げなセミナーにも参加するようになった。しかし、いくら知識を得ても、腑に落ちないものが、邦人の中に常にあった。そして、自分はおもひがして普通ではないのだろうか？ という疑問が邦人の頭の片隅を過るようになった。得体の知れない自分と他人との決定的な違い、生き辛さの正体、その答えに辿り着くまでに、二十年の時を要した。あの人がいなければ、決して辿り着くことは出来なかっただろうと邦人は思う。あの人と出会ったのは邦人が失望の果てに「諦め」を選択しようとしていた頃だった。

邦人は二十代半ばの頃、福祉関係の職場に勤めていた。先輩で二歳年上の男性職員から邦人は「嵐を呼ぶ男」と呼ばれる事がよくあった。その時それが、どういう意味なのか邦人は分からなかった。

ある時、その先輩に飲みに誘われ、その席で、邦人が知らないうちに職場の人間関係を掻き乱し、仕事に支障をきたす言動を行って

いる事を、聞かされた。職場の同僚から、邦人が、嘘つきで、腹黒い偽善者と陰口を言われている事も、先輩は隠さず正直に話してくれた。先輩は、邦人を責めるつもりではなくその事に気付き、対処して欲しいという思いから自分に話してくれたのだと理解した。先輩は責任感が強く優しい人だったから、邦人を信じ、職場で非難する人達の間に入って、自分を守ってくれていたのだと、今になって邦人は思う。

自分という人間を客観的に知った、初めての経験は、邦人に大きな衝撃を与えた。邦人はその頃、少しでも善い人間、優しい人間になって世のため、人のために役に立ちたいという夢を持っていた。でも、自分が良かれと思つて行ふ行動は、誰かを傷つけ、組織を破壊してしまう。邦人は、自分の正体を知った日から、しばらくして体調崩して休職し、逃げるように、その職場を去った。もう全てが嫌になって、生きる気力も無くしていった。

真冬に富士の樹海に入る計画を真剣に考え、準備を始めていた。準備していたリュックには、父の写真、着火器具、焼鳥の缶詰、焼酎、お気に入りの歌謡曲を詰め込んだガラケー、そして数日分の睡眠薬を忍ばせて。あの人との出会いは、ちょうどその頃だった。

三宮の繁華街を当てもなく歩いていると男が凄いい勢いで邦人の方へ向かって走ってくるのが見えた。こんな街中で、全力疾走する人間は見たことがなかったので、これは只事ではないと邦人は思った。近付いてくる赤髪の男は、人とぶつかりそうになりながら、邦人の方へ向かってくる。男の顔がはつきりと分かる距離まで近付いたとき、男の後方から「ドロボー」という女性の声が響き、さらに「捕まえて」と叫ぶ声が、邦人に向けられている事を確信し、横を駆け抜けようとする男の足首目掛けて、体勢を落としながら、無我夢中で、自分の脛をぶつけた。重い衝撃と痛みが邦人の脚に走った。振り返ると、男が植え込

みの中の電柱に、頭をくっつけて倒れていた。男は動かなかった。接触の直後に聞こえた鈍い衝突音から、きつと電柱で頭を打って気絶しているのだろうと邦人は思った。遠くでサイレンの音が聞こえ始め、その音が少しずつ大きくなっていくのを、邦人は歩道にしゃがみ込んで、呆然としたまま聞いた。

警察署からの帰り際に、先ほどの、ひったくり事件の被害女性が、邦人に声をかけてきた。女性の方から、お礼がしたいと言われ、邦人は断ったが、どうしても気が済まないと思願され、仕方なく、夕食をごちそうになる事で話は収まった。駅前の居酒屋に入り、テーブル席に座った。対面した若い小柄な女性、ショートヘアがよく似合う、丸顔で瞳のきれいな、美人というより、小動物の様な可愛らしさと、人懐っこいオーラが溢れ出ている様な人だった。邦人は、きつとこの人は、誰とでもすぐに、仲良くなれる、自分とは真逆のタイプの人なのだろうと思った。

邦人は女性とプライベートで面と向かって話した経験がなく、最初は目のやり場に困り何を話していいのか分からずに、ただ俯いてビールをすすするように飲んでいた。女性は、神戸の病院に勤務する看護師で、年齢は邦人より三つ年下だった。『真実』という名前は古い師だった父方の祖母が、占いに従って独断で名付けたとの事だった。真実は邦人の様子にもお構いなしに、よくしゃべり、よく笑った。職業柄、人との会話に慣れているのかそれとも元々の性格なのかは分からなかったが、自分のような『コミュ障』の男にも、気さくに接してくれていたと記憶している。

真実は、北海道出身で、父親の仕事の関係で東京を中心に関東地方を転々として育ったため、話すときは、色々な地方の言葉が入り混じってしまうとの事だった。真実が聞き慣れない関東弁で、たくさん話し、時折、真実の質問に邦人が、こてこての関西弁で、ぼそぼそと答えるパターンで、初対面にもかかわ

らず会話が途切れることがあまりなかった。真実は、ハスキーだけど、艶のある魅力的な声をしていた。真実は、犯人を捕まえた邦人の、今日の身のこなし方は、素人に来る動きではないと大絶賛し、何度も礼を言った。真実に、格闘技をやっているのかと尋ねられ邦人は、やっていないが、体は鍛えていると答えた。その理由をきかれ、自分を守るためだと答えた。

真実は、趣味が、プロレス観戦と、占い、そして食べる事であると、エピソードを交えながら面白おかしく語った。生年月日と血液型から二人の相性を占うと、怖いくらい、何もかも良いと、真顔で言ってくるので、邦人は、どう答えていいのか分からなかった。

真実は、邦人の趣味は何かと尋ね、邦人が『マラソン』と答えると、目をキラキラさせて、自分も中学の時に陸上部で駅伝の選手だったと、顔を近づけながら、少し上ずった声で告げた。そして、今度、一緒に公園でジョギン

グがしたいと、邦人に懇願した。邦人も真実にまた会いたいと思い、承諾した。誰かにまた会いたいと思うことは、邦人にとって生まれて初めての経験だった。

それからも真実と会うようになり、いつの間にか、付き合うようになった。真実はいつも明るく、温かかった。真実は、古い師の祖母の影響なのか、邦人の知らない独自の世界観と死生観を持っていた。

真実は、人は死ぬまでに、この世の責務を果たさなければならない、といった意味の話を、言葉を変えながら邦人に何度も語った。この世の責務とは何かと邦人が問うと、持つて生まれた自分の「形」を、この世に刻む事だと、真実は、いつも力強い口調で答えた。また「因果応報」や「輪廻転生」という、邦人にとって聞き馴染みのない言葉をよく口にした。邦人は、その時あまりピンとこなかったが、真実の真剣な眼差しから、その言葉が邦人に向けられた教えのようなものだと思

出来る限り、善い行いをしようと心掛けた。そして世間一般の善悪の判断を、真実にアドバイスを求めることが多くなっていた。

邦人が真実と出会う前に、樹海に行こうとしていたことを話すと、真実は、少し怒ったような表情で、困難から逃げたとしても、またいつか形を変えて、必ず身に降りかかってくる。それは今生かもしれないし、来世かもしれないけど、今は、そこから逃げずに、少しでも、一ミリでも先に進めるような手段を考えないといけない。自ら命を絶つて、逃げてしまうのは、言語道断だと語った。

二人は付き合ってから四年後のクリスマスに入籍した。邦人にとって真実は特別な存在だった。自分の事を無理せず、自然に理解しようとしてくれる、優しい妻だった。真実と出会ってから、それまで全く理解不能だったこの社会のルールや仕組みが少し理解出来るようになった気がした。邦人は自分と、この世界を繋いでくれる、かけがえのない大きな

存在が、偶然にも自分の前に現れ、妻となつてくれた事が、不思議で仕方なかった。精神科の看護師だった真実は、邦人の事を普通では無いと気付いていたはずなのに、そんな素振りは全く見せず、いつも邦人の全てを自然に受け入れてくれた。

「マミは何で、こんな自分の気持ちも、他人の気持ちも分らんような、俺みたいな人間と一緒になつてくれたん？」

「何でつて何？ そんなの、好きになつたらに決まつてるじゃん」

「でも、俺、マミにも、周りの人にも迷惑かけてばかりやる？」

「クニちゃん、完璧な人間なんかいないし、そんな人間が、もし存在したとしても、何の魅力も私は感じないと思うよ。長所や短所が混ぜこぜになつてゐるから、人間は面白いし、色々な人がいたから、ここまで人類が進化出来たんだと思う。苦手なところをお互い補い

支え合うのが、良い人間関係で、その究極の形が夫婦だと思うんだよね」

「クニちゃんには、私には無い、良いところいっぱいある。クニちゃんは純粹で真つすぐな人間。よく誤解されて、裏がありそうだと思うわがちだけど、はつきり言つて、表だけの馬鹿正直人間。だから衝突するし、傷付くことも多いんだよね。私は、優柔不断で、占いにばかり頼る、八方美人の馬鹿女だから私にはクニちゃんが必要な人なんだよ。私みたいに、周りの人間関係にがんじがらめになつて、身動き取れなくなつてゐる人間と違つて忖度とか、配慮とか、計算なんかと無縁の、クニちゃんのような人達が、案外、この世の中を大きく動かしてるのかもしれないね」

「話は戻るけど、逆にクニちゃんは、私の事好きじゃないの？」

「俺、正直言つて、人を好きになる事が、どういうことか、よう分からんねん。昔から人間嫌いやから、独りが楽やった。でも、何で

か分からんけど、ママにだけ、初めて会った時から、今までずっと、また明日も会いたいですと一緒になりたいと思ってしまふ。それって、好きという事やるか？」

「クニちゃん、前にも言ったと思うけど、そういうところなんだよ。自分では何も自覚してないだろうけど、そんなに、純粹で真つすぐな告白されたら、誰でも胸がキュンとして、惚れてしまふじゃん。この女たらし」

入籍してから一年後の結婚記念日に、真実が事故で突然この世を去った。

真実は仕事の帰り、アパートの近くの道幅の狭い道路の横断歩道を渡っていたところ、大型バイクと接触して転倒し、頭を強く打ち脳外科に救急搬送された。脳内の出血箇所は広範囲に渡り、医者は手の施しようが無いと目を伏せながら邦人に告げた。真実は、意識が戻ることなく、事故から二日後の深夜に静かに息絶えた。真実が死んでも、邦人の目か

らは涙は出なかったが、葬式の後、血を吐いて、しばらく入院した。

真実に二度と会えないと思うと、氷の刃で胸を刺されるような、強烈な痛みを感じた。

夢でもいいから、真実と会いたい、話したいと思った。邦人は真実の死後、何気なく真実の愛用していた鏡台の前に座り始めた。真実に会いたいという気持ちは日ごとに強くなり会えるのであれば、何でもしようと邦人は決意した。インターネットで「死者と会える方法」を検索してみると、オカルト的なものや違法薬物に関するものが多くヒットしたが、自分には正攻法が合っていると思い、邪道なものは排除した。そして邦人の中で【イメーヂ力の強化】と【集中力の強化】が必要であり、自分に欠けている要素だという結論に達し、そのために有効だと言う事を、手あたり次第に実践していった。ジョギング、ヨガ、呼吸法、坐禅、断食、音楽瞑想等を行いながら、真実の生前の写真を何度も繰り返し眺め

ては、その姿を脳裏に焼き付けた。また、生前に真実と交わした会話を思い出し、ノートに書き留めていった。そして、今、もし真実に会えたら、何を訊いて、真実なら、どう答えるかを考えながら、真実との問答集のようなものを作成した。こうして、邦人が自分の中で『儀式』と呼ぶ、真実に出会うためのルーティンが生まれ、生活の一部となつていった。ホームセンターでの勤務以外の時間を、真実に会うために全て費やし、修行僧のような日々を過ごした。そして三年が過ぎた。

冬のある日、邦人はジョギング中にランナーズハイの体験をした。気分が高揚したまま自宅に帰って、儀式をこなしていた。瞑想が終わって、目を開けると、鏡に映っているのは自分ではなく、真実だった。夢ではない、自分の意識は、ちゃんとある。気配を伴ってリアルな真実が目の前にいる。邦人は、しばらく、思考が止まり、動けないでいた。夢は現実となったが、その後の展開まで邦人は頭

が回らなかった。

「真実か？」

掠れる声で邦人は、そう尋ねたが返事はなかった。邦人と同じように、真実も戸惑っているような表情に見え、すぐに姿は消えた。

『マミ』は、それから一、二か月に一回のペースで鏡の中に現れた。マミが現れる日は、何か法則性があるのかと思い、あれこれ考え調べてみたが結局何も分からなかった。ただ、マミが現れた日は、邦人の体調が比較的良い日である事が、ほとんどであったため邦人はさらに、自分の健康に気遣うようになった。マミが現れ始めてから半年後、邦人の問いかけに、初めてマミが答えた。邦人の胸の中で、何かが強く突き上がってくるのを感じ、呼吸が乱れた。

「マミ？」

「うん」

「今日も来てくれてありがとう」

「うん」

「また来てくれるか？」

「うん。また来る」

それから、マミは時々現れ、邦人と会話した。そして、少しずつマミの言葉数が増えていった。今では、生前と同じようなテンポでやり取りが出来るようになった。マミの声は、音声として耳に届くというより、ちょうど、お気に入りの歌謡曲が、頭の中で直接、再生されているような感じだった。でもそれは紛れもなく真実の魅力的な声だった。

「女たらしって、酷い事言うなあ。でもたまたした事あるのは、真実だけやからな」

（本当かな？）頭の中にマミの声が響く。

「マミなあ、色々考えたんやけど、結婚五年の区切りとして、もう俺らこうして会うの、これで最後にしようと思うねん」

（うん。私も同じ事言おうと思ってた。クニちゃんは、もう一人でも大丈夫。クニちゃんの魂の中には、私の一部が入っちゃってると

思うんだ。もう私達は、離れたくても離れられない同じ「モノ」だよ。後は、クニちゃんが、それをこの世のパズルに、どう組み込むかだね。私の分もあるから、クニちゃん責任重大だよ。しっかり頼むね）

「クニちゃん愛しています」マミは泣いたような笑顔で、そう邦人に告げた。

「ありがとう。マミ」

邦人は、マミとの会話の余韻に浸りながらふーと深い息を吐いた。そして卓袱台の上でパソコンに向かいキーボードを叩き始める。最近始めたブログを更新する。

みんなのブログ #アレキシサイミア

タイトル カミングアウト

私たち一人一人は、進化の最先端に生まれ、それぞれの形の代表選手。色々な形があつていいし、そこには、人間が考えるような優劣なんかあるはずがない。そしてこの自分という形は、自分だけのものではなくて、

この世の中で唯一無二の大切な形。未来を創る形のひとつだという事を忘れないで欲しい。だから胸を張って生きればいい。そして、何も自分を、隠して生きる必要はないし、自分の個性を殺して、他者や社会に、全てを合わせて生きる必要はない。それは、個性のぶつかり合いから、新たな進化を望む、この世の創造主の意思に反する事だと思うんだ。

人の気持ちが分からず、空気が読めなくても嘘をついたつもりがないのに、嘘つき呼ばわりされても、悪気がないのに、周囲を混乱させても、何をやっても上手くないと感じても、それが最善を尽くした結果なら、今はそれでいいんじゃないかな。そして、そこからまた考えて、一步でも先に進めるように、努力と工夫をしていこう。自分という形をこの世のパズルに、上手くはめ込むためにね。そのためには、誰かの力を借りることも必要だと思う。まわりを見渡すと、自分の事を理解してくれそうな人が、きつと一人はいるは

ず。もし見つからなくても、今は私が、その一人になるから、心配しなくて大丈夫。信頼できる人が現れたと思ったら、勇気をもってカミングアウトしてみよう。きつとそこから何か新しい事が展開すると思うよ。

【髭のない猫クニ】より

邦人は、息を吐き出し、パソコンをそっと閉じる。部屋の天井と壁に、隙間なく貼られた大小様々な、真実の写真が、邦人の視界に入る。所々に真実の衣服や装飾品を配置してあるのは、ヤツらの侵入を阻止するため。

邦人は生活の中の、ふとした瞬間に、現実と幻覚の境界が曖昧になっているのを感じる事が、最近よくあった。『今、これは、幻覚の中に断片的に現れている現実なのか？ 現実の中に断片的に現れている幻覚なのか？ それとも全てが、どちらか一方だけなのだろうか？』と。この部屋は、どこにでもズカズカと現れる、ヤツらにも絶対に入れない、真

実で埋め尽くされた、神聖な部屋。この部屋だけは、今が現実であると確認出来る、唯一の安心出来る場所だと邦人は考えていた。

邦人は目を瞑り、考え続ける。死んだはずの真実が現れる奇跡の現象について。そこに至ったのは、真実に対する、自分の強すぎる執着心に起因する、病的な行為であり、もしかすると、自分が体験している、この奇跡とは、精神疾患の症状の一種なのかもしれないという事を。このままではいけない事は何となく分かる。鏡の中のマミとは、決別しなければならぬ事。そうしなければ、いつか「ヤツら」に支配され「マミ」が「真実」ではない、化物になつてしまうかもしれないという事も。マミと会えなくなるのは嫌だけど真実だけは汚されたくないし、守らなければいけないと、邦人は強く思った。

「真実……」

邦人は、全ての思いを込めて、絞り出すような声で、妻の名を呼んだ。

そして、覚悟を決めたように、目を見開き、膝を叩いて、勢いよく立ち上がる。カーテンを勢いよく開けると、陽光が弾けるように、一気に部屋中に押し寄せ、邦人は少し目を細めた。窓を全開にして、外の新鮮な風を入れると、閉じていた二人だけの世界の扉も、少し開いたように感じた。

「今日は部屋片付けて、クリスマスツリー飾って、明日はピザでも頼もうかな」

邦人は、胸のモヤモヤを振り払うように、陽気なトーンで呟く。

邦人は、いつもと違う明日を選択した事でしばらくの間は、パニック症状が現れ、体が不調になるだろうと思った。でも、この選択は、後退ではなく前進であり、逃げずに全部受け止めてやろうと思った。主治医には隠していたマミの事も全部話して「ヤツら」に立ち向かっていく覚悟を決めた。これから、少しずつ真実との約束を果たしていこうと胸に誓った。そして、心の中で真実に今の自分

の思いを伝えた。

『真実、愛してる。多分やけど』

（多分は余計だね）頭の中に、低めのトーンで、真実の声が聞こえたような気がした。



《優秀賞・一般の部》

創作分野

ともだち

阿部 忠彦

「女子中学生がオーバードーズで補導された」と、新聞に報道されたのは、恭子が中学二年になった四月の終わりの月曜日だった。補導されたのは大阪だったから、「うちの中学校には関係ないよね」などと、母と話をし、て登校した恭子だったが、校門に停まってるパトカーを見てびっくりしてしまった。「何かあったのかな。朝からパトカーなんて」

下駄箱でひそひそ話をしていた同じクラスの莉子と桃華に話しかけた。

「朝からさ、見たんだよね。ネット。そして、大阪の薬で補導された中学生の中にうちの生徒もいるって書いてあったのよ」

先生からは、「ネットの不確かな情報に惑わされたり、拡散したりしてはいけません」などと言われているのに、莉子は自慢げにネット情報を披露した。

「ええ、やばあ。うちの中学校にそんな人がいたんだね」

「ちよつと、何言うとん、恭子。うちのクラスの矢野幸さんじゃないかって、ネットに書いてあったわよ」

「ええ、矢野さっちゃんのこと？」

恭子は自分の大声に思わず口を押さえたが、すかさず付け加えた。

「うそだよ。そんなことができる子じゃないよ。オーバードーズなんて考えられないよ。何かの間違いだよ」

恭子は幸を擁護した。

「でも、あの子暗いし、恭子以外としゃべら

ないし、成績良くないし、中一のとき担任の岡本先生に『こんな成績じゃいける高校なんてないわよ』って、言われたらしいわよ」

「そりゃあ。小学校一緒だし、二人は仲良かったからかばうのは分かるけど、恭子は成績良いし真面目なんやから、付き合う友だち選んだ方が良いと思うよ」

横にいた桃華まで、さも恭子を心配するよう言いつのつた。

矢野幸とは、保・幼・小・中が同じだった。同じクラスになったのは三回ほどだが、小さい頃は互いの家をよく行き来していたから、友だちであることに違いはない。だが、親しいかというところでもない。目を開けると視野の中に普通にいて、それが苦にならない。そんな仲だ。込み入った話はしないが、自然に会話をしていることが多い。そんな幸が、薬を大量に服用するなど考えられない。何があったのだろう。恭子の頭に、まだ幼さの残る幸の顔が浮かんだ。だが、「いけない。自

分も不確かな情報を信じてしまっている」と、心の中でそんな思いを吹き消した。あくまでも、まだ噂の段階なのだ。

一時間目は、担任の岡本先生の数学だった。「先生。矢野幸さんが補導されたって本当ですか。ネットで見たんですけど。四月初めに何日か登校しただけで来なくなったから、どうでもいいんですけど、一応クラスメートなので気になります」

お調子者の沢田君が、授業を始めようとしている岡本先生に先制パンチを浴びせた。

「ああ、校門にパトカーが停まっていたからその事件と関連付けちゃって、気になっているのね。でも、それと矢野さんの不登校とは関係ありません。警察官は別件で校長先生を訪ねてきているだけですから」

「じゃあ、何でネットに名前が出るんですか」
沢田君は食い下がった。勉強もこれぐらい興味を持ってやればもっとできるようになるだろうに。

「矢野さんが学校に来ていない理由はいろいろとあるのだと思います。ネットの記事は、いつも言っているように偏見に満ちているものも多いです。それを、鵜呑みにして拡散したり噂話をしたりしてはいけません。ひどい場合は罰せられますから、付け加えておきます。沢田君、それ以上あることないこと吹聴して回らないで。いいわね」

岡本先生は、沢田君にバシッと釘を刺してから授業を始めた。

「直線 $Y \parallel 3X$ と平行で、切片が2である一次関数の式は……」

恭子は頭を切り替えた。

次の日も幸は登校しなかったが、クラスの誰ももうそのことを口にしなかった。沢田君でさえ。その様子は、幸を元からどこにもいなかった人として、意識の外に置こうとしているようで、恭子は寂しかった。しかし、「幸って、どうして休んでいるのかな」と、口にしたとたん、自分の周りから潮が引くよう

に友だちが誰もいなくなる現実を突きつけられては、さすがに恭子も幸のことを話題にするのがはばかられた。恭子だってクラスの中の立ち位置は守らなくてはならない。仲間はずれにされたら、学校へ通ってくる意味の半分以上はなくなる。だが、幸の気持ちを考えると、それも薄情なようで、「不登校っていったって同じクラスの友だちなのになあ」と、ひとりで呟いてみたりした。

五月終わりの学級会の時、岡本先生は突然切り出した。

「今まで、いろいろ事情があって休んでいた矢野幸さんですが、月曜日から登校してくれることになりました。戸惑うことも多いと思いますので、みなさん、何かと助けてあげてください」

教室がざわついた。

「先生。そんな補導されたような人が来ても、どんな声をかければいいのか、分かりま

せん」

沢田君が言い放った。明らかに暴言だ。幸が補導されたことを前提にして、声をかけないことを正当化しようとしている。しかし、恭子は何も言えなかった。

「そんなこと言わないで。矢野さんは……」
クラスの他の人の発言が、岡本先生の発言を止めた。

「先生。私たちが悪い方に引き込まれたら、責任取ってくれますか？」

「何をやったのかはつきりさせてください」
「そんな子は、うちのような普通の中学校に通うんじゃないくて、そんな子ばかり集めた施設とかへ行く方がいいんじゃないですか」

クラスみんなが口々に勝手なことを言い始めた。

「ちょっと、みんな待ってよ。みんなは幸を悪い子やって、決めつけて発言してるけど、それって本当に正しいことなん？」

恭子は我慢できずに立ち上がった。

「私は保・幼・小・中と一緒やし、小学校の時はよく両方の家に遊びに行ったから分かっているけど、矢野幸さんは悪いことのできる子じゃありません。とても優しい子です」

「でも、一年生の時はいじめられていました。不登校だったし、成績悪いし、部活してないし、第一みんなとしやべらへんかってんで。恭子、何でかばうん。そんな子！」

最近友だちになった遙香が声を荒げた。

「だったら遙香さんは、成績悪くて部活してなくて、みんなとしやべらへんかったら、友だちじゃないって言うの。そんな訳の分からない理由をつけていじめて、学校へ来られなくしたのは、あんたらちゃうん？」

遙香は下を向いた。クラスの誰も反論してこなかった。みんな分かっているのだ。どんな理由があつたとしても人をいじめてはいけない。いじめは犯罪なのだというのを。でも、やってしまふ。普通じゃない。ネットで何かされた。うざいなどという自分勝手な理

由をこしらえて。それがいじめの怖いところだ。

「じゃあ、佐々木さんは、矢野さんと普通にしゃべれるの？」

「うん。しゃべれるよ。だって、普通にしゃべることがさっちゃんと私の普通やもん。小さいところから普通にそうしてきたんやから」

「矢野さんが犯罪者でも？」

沢田君が、また発言した。

「それが、気に入らんわ。沢田君。君は何でさっちゃんを犯罪者って決めつけてるの？現場を見たの？」

沢田君は何も言えずに下を向いた。

「たとえ補導されていたとしても、一回やってしまったら中学校へ来たらかんの。人生、それで終わりなん。何で『あの子はダメな子や』ってレッテル貼ってしまうの？」

「高校へ行ったら、知らない子ばかりやから、あいつの人生も変わるんちゃうか」

沢田君は、言った後ヘラヘラ笑った。

「ちょっと沢田君。この後二年間、幸に『いじめられるのを我慢せえ』っていうの？自分がいじめられていたら我慢できるの。みんな我慢できへんから自殺してるんやで。今の発言は幸に『自殺せえ』って言うてるのと、同じことやで」

「いや、俺、そんなつもりで……」
すかさず、岡本先生が発言した。

「みなさん。先生も佐々木さんと同じ意見です。いつも言っているようにいじめは、今止めないといけません。待ったなしです」

「でも、先生。今、佐々木さんは、話するのが矢野さんと佐々木さんの普通だと言ったけれど、それだったら私たちにとつての普通は、悪い方に引き込まれないように、そんな人と話をしないことなんです。だから、話しかけないという私たちの普通も、権利として存在するんじゃないんですか？」

委員長の桃華が発言した。恭子はあきれて口が開いたままになった。

「矢口桃華さん。それは違います」

岡本先生は、言葉に力を込めて言い切った。
「話しかけずに人をいじめるような権利は存在しません。それは、はっきり違います。そんなことを認めれば、『差別してもよい権利』までも認めてしまうことになりますからね」

「済みませんでした。発言を取り消します」

桃華には分かっているのだ。そんな道理が通用しないことを。でも、言ってしまった。

桃華は、これまでいじめは悪いと分かっているのに見過ごしてきたのだろう。そんなへりくつを頭の中でこね回して、『だから自分は悪くない』と、自分自身を正当化させてまで。

「先生は、今のみんなの発言を聞いていて、みんなには『一緒にクラスで同じ年齢の子ども達が学ぶことの意義』を考えてほしいと思っています。どうしてだか分かりますか？ 沢田君はどう思いますか？」

「えええ？ 同じ頃に生まれたから、人間の

発達状態が一緒だからですか」

「そうですね。人間の発達状態には心と体がありますね。他には？」

「心と体が同じように育つということは、考えることも大体同じだから、同じ学習内容が理解できるということになると思います」

「そうですね。じゃあ心は？ 佐々木さんは、どう考えますか？」

恭子は考えながら立ち上がった。

「はい。よく分からないけど、心も同じ年頃の人たちと一緒に過ごすことで同じように発達するということなんですか？」

「ええ。そうなんです。学校へ来て、泣いたり、笑ったり、勉強したり、部活したり、誰かを好きになったり、体の変化を話題にした、そんな当たり前のことを毎日毎日積み上げることで、君たち中二、十四歳の心はできあがってくるのだと思っています。いじめたり不登校にさせてしまったことは、心を形成する機会を、その子から奪っているこ

とになります。それは、その人の生きる権利、成長する権利を奪うことにもつながります。心はみんなと一緒に生活しているからこそ形成できるのだと思うのです」

岡本先生は、最後は涙声になってしまった。みんな黙って聞いていた。

六月に入った月曜日。矢野幸は登校した。

「さっちゃん、久しぶり。おはよう」

恭子は登校するなり、幸に声をかけた。先に登校していた友だちが一斉に注目した。

「おはよう」

幸は低い声で、ぼそつと言った。

「元氣そうやん。顔、真っ白やけど。それに痩せたんちゃうん？」

「そやろ。何しろ閉じこもってたからな。一ヶ月ほど」

すぐに授業が始まったので、朝の会話はその程度だったが、幸が思いのほか明るかった。で、恭子はほっとした。

「なあ恭ちゃん。お弁当、お母さんが作ってくれるの？」

幸と本格的にしゃべったのは、昼休みの時間だった。幸は菓子パンをかじりながら話しかけてきた。

「うん。まあ」

恭子は曖昧な返事をした。

「ええなあ。それって。お母さんと仲良いのって」

「そうかなあ」

どうして、弁当を母親が作ると親子の仲が良いのだろう。恭子は少し興味を持った。

「仲良いのかなあ？」

「決まっとうやん。うちなんか仲悪いから、毎朝千円渡されて『これでお金余るやろ。それで』

「でも、ええやん。お金余るやろ。それって、さっちゃんの小遣いになるやんか」

「なるわけないやん。うちはお母さんと二人暮らしやで。ああ、恭ちゃんところもそうや

けど、お金、かつかつやから余った分は貯金や。それで学用品なんか買うねん」

「うちのお母さんは、弁当作る方が安いって言うてる。それにな、これ……」

恭子は弁当を指さした。

「詰めてるのは私やで。どや、すごいやろ。

レンチンばかりやけどな。お母さん、朝は忙しいし、朝ご飯作って、洗濯物干して、私より早いこと出て行くから」

「なるほどな。恭ちゃんにできるんやったら、私もやってみようかな」

そんなとりとめの話をしているとすぐに時間が経ってしまう。他のみんなも話をしながら食べているが、恭子と幸の話に聞き耳を立てている人もいようだ。時折教室中がしいんとなる。

放課後、恭子は幸と一緒に下校することにした。弁当の話を続きをしていると、高校生くらいの女子二人に話しかけられた。

「おう、幸。元気そうじゃん。お前だけ、お

とがめなしなんておかしいよな。うちらは二ヶ月近く入っていたのによ。それに、高校へ入れんかったんやからな。お前だけ謹慎ってか。世の中不公平だよな」

幸は、下を向いて何も言わなかった。どうやら、幸の「閉じこもっていた」のは、本当のようだ。

「こいつ、お前のダチか？」

幸は何も言わずに、恭子の前に立ちはだかった。

「何だよ。ダチかって聞いているだけだろう」

幸は、それでも何も言わず立ち尽くした。

一人が強く左肩を押したが、幸はびくともしなかった。

「こいつ、ばかなくせに体だけ丈夫だからな。うちらが薬を用意してやっていた恩を忘れたのかよ。ダチの名前だけ聞かせろよ」

幸の体を押しのけて名札を見ようとした先輩に、幸は体を押し当てた。先輩はのけぞっ

た。

「この子は、私とは違いますから、放っておいてください」

「こいつ何すんねん」と、叫びながら拳を振り上げたが、もう一人の先輩が止めた。

「やめとこ。今、問題起こしたら、また逆戻りや。幸、おぼえときや！」

「ほんと、お前丈夫すぎて、薬を飲んでも効かないんだからなあ」

二人は悪態をつきながら去って行った。どうやら、下校する幸を待ち伏せしていたようだ。

「あの二人には、二度と近づくなって言われているの」

「ありがとう幸。かばってくれて」

「ううん。ええのよ。あの人らの誘いに乗ったうちがあほやったんや。恭ちゃんまであの子らに目をつけられるのを黙ってみていたら、わたし、ほんまに友だちなくしてしまから。必死やった」

幸は大きく息を吐いた。そして、歩きながら事の顛末を話してくれた。

一年生の冬の三者面談の時、幸は担任の岡本先生に言われたのだ。「あなた、この成績じゃ、いける高校なんてないわよ。高校生活ができなくなってもいいの」と。岡本先生は、もっと頑張れと励ますつもりで言ったのだろうが、幸はまともに受け取ってしまった。面談から帰る途中、「お母さんも一生懸命働いてるんやけど、あんたを塾に通わせてあげられるような余裕はあらへん。幸、ごめんな。お母さんが悪いんや」と、母親が嘆いたことも幸のショックに追い打ちをかけた。幸は「親ガチャ」という言葉が嫌いだった。生活に余裕がなくても母と二人で暮らしていることに幸せを感じていたのに。幸は益々成績のことやいじめられていることで、これ以上母親に心配をかけられないと思った。

そんなある日。幸は腹が痛いと思っただけで早退した。下校中、三年生の女子二人に声を

かけられた。

「ねえ、授業抜け出したの？ 何かあった？」

さも、幸を氣遣うように声をかけてくる先輩に、ぼろっと本音を漏らしてしまった。

「勉強が分らないし、いじめられてるし。もう、どうでもいいかなって思ってた……」

「そうか。うちらとあんまり変わらへんな」

そう言った後、二人が目配せするのが分かった。なぜ、この人達に本当のことを打ち明けてしまったのだろうと、後悔する気持ちが湧かないでもなかったが、まあいいかと思つた。幸の頭には、ちらっと恭子の顔が思ひ浮かんだ。恭子とは、ずっと友だちだった。中学になってクラスが離ればなれになってからはあまり話をしなくなった。恭子が部活や勉強で忙しくなったこともあるが……。今、恭子がいてくれたらなあ……などと、考えていると、三年生の会話が耳に入つた。

「まだ中一だろう」

「早くね？」

中三の二人は、ごちゃごちゃ話をした後、

「ついてきて」と言つた。幸は、深く考えることもなく、促されるままに電車に乗り大阪まで行つた。連れて行かれた橋の下には、同じ年頃の女子中高生が十人近くいた。幸のように制服のままの子も多かった。何が始まるのだろうとぼんやりしていると、大人の男性が風邪薬をただで配りだした。彼女たちは躊躇することなく大量に手に取り出し、ペットボトルの水で飲み下していった。幸も飲むように言われたが、頑なに断つた。薬を飲んだ後、彼女たちがだんだん何を言っているか分からなくなり、その辺に寝転びだしたからだ。ただただ怖かった。何をするのかも知らずに、優しく声をかけてくれた先輩達についてきたことを後悔したが、もう遅かった。寝転んでいる中三の二人をその場に残して、幸は逃げるように電車に飛び乗つた。

だが、それから毎日のように二人から呼び出しの電話がかかってきた。幸は、断り切れ

ずにはずるとついて行った。今ならはつきりと断れると思うが、そのときにはそんな勇氣はなかったし、声をかけてくれる人がいるだけで幸せなのだと思おうとした。家を出る前に鏡を覗くと、青白い顔で頬のこけた女の子がいた。幸は思わず眩いた。

「あなたは誰？ 本当に矢野幸さんなの？
今からでも、昔のちよっと丸顔の女の子の幸に戻れる？」

鏡の中の女の子は、何も言わなかった。こんなに変わってしまったのに、何も声をかけてくれないクラスのみんなど同じように。幸は玄関の鍵をかけて先輩達の待つ駅に急いだ。

四度目について行ったとき幸は本当に風邪をひいていたので、先輩からもらった風邪薬を処方より多く飲んでしまった。それで、気分が悪くなり横になっているところを補導されてしまった。

「それって、岡本先生のせいやし、先輩らの

せいやんか。事情を話さなかったの？ 補導されたときに」

話を聞いていた恭子は、立ち止まって思わず幸の顔を覗き込んだ。幸がのけぞった。

「警察の人からは何度も言われたわ。『こうなる前に、どうして周りの信頼できる大人に相談しなかったの？ 公的相談機関もあるでしょう』って。でもな、恭ちゃん。お母さんは忙しすぎてゆっくり話す間もないし、第一わたしの変化に気付きもしていなかったのよ。担任の岡本先生は怒ってばかりやし、恭ちゃんは違うクラスやし。それにな、公的機関って何？ そんなん知らんわ。だれも教えてくれへんかったやん」

恭子はその頃のことを思い出してみた。幸は、違うクラスだったから恭子に相談に乗ってもらえなかったと言った。だが、本当は違ったのだ。

「さっちゃん。ごめんな。私ずるいの。私、さっちゃんが落ち込んでるの分かっていた。

でも、さっちゃんは、みんなから嫌われて仲間はすれにされて、そんなさっちゃんに話しかけて、私も仲間はすれにされたら嫌やつて思つて、話しかけられへんかつてん。さつき、さっちゃんは私をかばってくれたのに、私は卑怯者やわ。さっちゃんほどの勇気なんてどこにもない」

「何言うてるの。恭ちゃんは、私の憧れや。うちと同じお母さんと二人暮らしなのに、勉強できるし、部活頑張つてるし、言うことなしや。謝らんといて」

恭子は涙が出そうになった。なんて優しい子なのだろう。

「なあ、さっちゃん。担任の岡本先生、見返したろ」

「えっ、どういうこと」

「一学期の期末。ええ点取つて、言うたろ。『これでもいいける高校ないって言うんか』つて」

「そらあすつきりするなあ。でも恭ちゃん。

それは無理やわ。気持ちはずれしい、そう言えたら、どんなに気持ちええかと思うけど……。どうせ、私なんか頑張つても……。無理や。無理無理」

「無理やない。さっちゃんが勉強できないのは環境のせいやから、環境を整えればできるようになるはずや」

幸は黙つて聞いていた。

「家に帰つて、一人でお母さん待つてる間の四時間ほど、いつも何をしてるの？」

「お母さんが帰ってくるまで不安。誰かピンポン押したらどうしようとか。だから、勉強なんかでけへん。ぼうつとテレビ見てるか、漫画読んでるか、絵を描くかしてる」

「さっちゃん、絵が上手やったもんな」

「うん。中学校へ入つて褒められたことが一回だけあるねん。美術の山下先生にな。『矢野さん。絵、上手やね。才能あるわ』って。『どこかで習ったの』って聞かれたから。はいえつて答えたら先生びっくりしてたわ」

「そうやったな。私にも漫画のキャラクターの絵、いっぱい書いてくれたもんな」

恭子は、キラキラ目の光るキャラクターの絵を思い出していた。

「ちゃうちゃう。今は勉強の話。その四時間ほどの間に勉強をするんやんか」

「それは分かるけど。何から手をつけていいのか、勉強の仕方もあるか」

「ここに誰がおると思ってたねん」

恭子は幸の前に立って胸をたたいた。幸は恭子にぶつかりそうになった。

「ええ。恭ちゃんが教えてくれるの？ それはどうしたいけど、部活はどうするの？」

「そんなもん。休みまんがな。大事な友達のためにですもの」

恭子は、そこらへんのおばちゃんの真似をして幸を笑わせた。

「あつ、恭ちゃん。今、私、笑ろたなあ」

「うん。笑ろたで」

「久しぶりや。笑ろたん。恭ちゃん、ありが

とう。笑わせてくれて」

「ええ、なんやそれ。でも、さっちゃんが笑ろてたら、私もうれしいわ。いやいや、話されてるし。勉強するで。今日、今からやで」

恭子は、そのまま幸の家に上がり込んで、すぐに教科書とノートを広げた。

勉強をやり始めて分かったのだが、数学は小学校五年生の割合、六年生の図形あたりからつまづいていた。恭子は一日の復習を中心に、分からない問題は小学校まで遡って教えた。その間、幸は洗濯物を取り込んで、アイロンがけまでした。また、米を洗って炊飯器のタイマーをセットしたりもした。母が帰ってくる七時頃に炊けるようにするのだという。だから、集中できたのは三時間ほどだったが、それは恭子にとつても充実した時間になった。幸に説明しているうちに、自分でも「そうか、だからそうなるのか」と、納得できる内容が多かったからだ。幸のためだけではなく、自分のためにもなると確信した。

土、日は、一人で図書館に行くことにした。六月は、空調がある日もあるからちようど良かったし、図書館も開館と同時に行けば空いていた。昼は隣接する公園で食べた。お互いの詰めたおかずを交換すると、楽しくてすぐに時間が過ぎた。

七月初め、いよいよ期末テストの日が来た。五教科のみ。二日間。出ると予想していた問題も大体当たった。これなら、幸も良い点が取れるだろうと思えた。

「どうだった、さっちゃん。できた？」

「うん。テストってこんなに簡単やったんかな。今まで悩んでいたのがうそみたいや」

「そうやろ。私もいつも以上に完璧にできたと思うわ。さっちゃんと勉強したおかげや」

「それはこっちの台詞やんか。ありがとう」
次の日から、それぞれの教科の時間にテストが返された。恭子は五教科とも満点だった。

幸も全て八十点以上だった。特に数学は九十点だったが、数学の授業の後、幸は岡本先生に職員室に呼び出された。幸は褒めてもらえるものだと思って、喜々として出て行つたが、教室に帰って来るなり机に突つ伏した。肩が大きく震えていた。

「さっちゃん。褒めてもらたんちゃうん。何で泣いてるの」

「こいつ、カンニングしたやつって怒られたに違いないわ。そやないとあんなええ点、こいつにとれるわけないもんな」

沢田君の声だった。恭子は弾かれたように走って行って、沢田君の胸を突いた。沢田君はその場に倒れ込んだ。何が起こっているのか分からないように目をぱちくりさせていた。

「沢田。お前、もういつぺん言うてみい。さっちゃんはカンニングなんかしてないわ。私と二人で、お前の何倍も何倍も勉強してきたんやぞ。それを……。それを……」

恭子はあふれる涙を手で拭いながら言った。

「それも知らんと、よう言えるな」

恭子は立ち上がりかけた沢田君に、もう一度向かっていこうとしたが、後ろから羽交い締めにされた。幸だった。

「恭ちゃん、もう止めて。普段の私の行いが悪いから誤解されるんや。私が悪いんやからもう止めて」

幸も泣き出してしまった。二人が抱き合って泣いているところへ、担任の岡本先生が入ってきて、みんなを座らせた。

「先生が矢野さんを職員室に呼んだのは、カニンングをしたのではないかなどと問い詰めるためではありません。よく頑張ったねって褒めるために呼んだのです」

「でも、矢野さんは泣いていました」

桃華が発言した。

「矢野さん。説明して下さい」

「私、中学校へ入って褒められるの二回目な

んです。だからうれしくて、泣いてしまいました。特に、岡本先生に『いける高校なんてないよ』って、脅かされていたから。これで高校へいけるようになるかなと思うと余計にうれしくて」

一度収まっていたのに、幸はまた泣き出た。

「ごめんなさい。てっきり泣いているものと誤解して。沢田君、ごめん。そやけど、『カニンングしたやろ』は、あかんやろ！」

「佐々木さん。謝っているのか。まだ、怒っているのか、どっちですか」

岡本先生に注意された。

「すみません。沢田君、本当にごめんなさい」

沢田君はゆっくりうなずいた。

「それにしても、佐々木さん。あなたがこんなに直情的だったなんて初めて知りました。あなたのバレーボールのスパイクは力強いと聞いていましたが、こんな場面で発揮するのは今回だけにしてくださいね」

岡本先生が、真顔で言った。

恭子は真っ赤になって座った。クラスのみ
んなが笑った。久しぶりにクラスに笑い声が
あふれた。

ああ、こんなふうにして心は育っていくの
かなと、恭子は思った。



《優秀賞・学齡児童生徒の部》

創作分野

一・五センチの命

久保川 みゆ

私は、この春、頑張つて受験戦争を終え、胸に希望を抱き第一志望の中学校に入学した。ようやく新たな学校生活を楽しめると思っていたのに、今なお苦しんでいる。仲が良い人は少し——いや、一人もおらず、クラスの中で、最も暗い人物となつてしまつてゐる。そして、学年一の問題児のお気に入り、サンドバッグにもなつてしまつてゐた。その人に毎日いじめられるし、同級生は、そんな私を見て見ぬふりをするから、さらに辛い。両親に心配をかけるといけないから、このこ

とを話していない。先生にも話していない。相談できる人は、一人もおらず、全てが辛くなつてゐた。もう、いつそ、この世から跡形もなく消えてしまいたい。でも、消えたら、私はどこに行くのか分からない。どうせまた、ひとりぼっちになるだけだ。別に、今もひとりぼっちだから、どっちにしても変わらないが、いじめられない方がマシだ。私は、最近このことばかり考えていた。死んでしまいたいということ。いつも見ていた通学路が、もう期限があるもののように見えてくる。もうこの通学路を通ることは、あと何日あるだろうか。

私がこんなことを考えていたら、近くから女の子の悲痛な叫び声が聞こえた。「ダメ！アリを踏まないで！」私の通つてゐる中学校は、ある小学校の隣にあつた。だから、よく登下校中に小学生の姿を見る。今日は部活動がなかったため、小学校とほとんど同じ時間帯に帰つてゐた。私は、声が聞こえたところ

へ体を向けると、不思議な光景を目にした。一人の小学二年生らしき女の子が泣き顔になりながら、必死に地面に手をかぶせている。そして、その手を踏みつけている同年代らしき男の子。私はすぐにこの状況を察知した。この女の子は、男の子が故意に踏もうとしているアリを守っている。手と地面の間に空間を作っていて、その空間の中にアリがいるのだろう。女の子は、手を踏みつけられながらも、必死に手を地面に押さえ、アリがつぶされないように耐えている。たかがアリだけに、なんであんなに必死に守ろうとするのだろうか。私は女の子の行動が、不思議でたまらなかった。面白くなかったのか、男の子は女の子の手を踏むのをやめて、「ちえっ」と舌打ちをしてどこかへ行ってしまった。「……行ったね」女の子はかぶせていた手をのける。私の予想通り、手をのけた場所には、小さなアリがいた。「よかった。これからは、氣を付けてね」少女が優しくアリに言う。すると、

アリはペコ、と小さなお辞儀をするように小さな体を大きく曲げた。

ふう、と吐息をついた後、その女の子は学校と街を遮る緑色のネットを通して、一部始終の出来事を見ていた私に気付いた。何も言わずにじっと私のことを見る。「何か用？」普通は、これを聞くだろう。知らない人が自分のことを見ているのだから。しかし、その子の行動は、私を驚かせ、私の予想を遥かに上回るものだった。来い、とでも言うように、その子は私に向かつて、手招きをした。私は呆氣に取られて、その子の近くへ行った。「ねえ、お姉さん。お姉さんって、虫好き？」この言葉を、全く予想していなかった私は、「普通だけど」とただ呆然と言った。「じゃあ、このアリ、何アリか分かる？」この発言には、どこか私のことを試しているような声色があった。でも、せっかくだから答えてあげようと思った。目を凝らしてアリを見た。緑色のネット越しで、少し見にくかったけれど、

その子の手の中にいるアリは、大きくて黒いアリだった。私はあんまり虫に興味がなかったが、このアリは自分の家の近くにもいるから、名前だけは知っていた。それ以外は何も分らない。「クロオオアリだね」私が答えると、その子は、パアッと顔を輝かせた。「お姉さんって、物知りだね！ 名前なあに？」

どうやら、この子は昆虫に興味を持っており、好奇心旺盛な女の子のようだ。そして私と友達になりたいらしい。「私は、鳴瀬りよう」
「あ！ りようちゃん！ おんなじ名前だ！ 私は蒼^{あお}時りようっていうの」私は、同じ名前であることと、こんなに親しく話してくれる人がいるのが、とても嬉しくて、ネットの間から手を伸ばした。「よろしく、りようちゃん」りようちゃんは、同じように小さな手を伸ばして私の手を取り握手する。「うん！ よろしく」

幸せな空気を破くように、六時を告げるチャイムが鳴った。もうちょっと話したかつ

たなあ。せつかくいい友達ができたそうなのに。でも、ルールは守らなければならぬ。「わつ、もう六時になっちゃった！ 私、もう帰らなきゃ！」私は、りようちゃんの手を離す。「ねえ、いつか、また来てくれる？ お姉さん」私は頷き、後ろ髪をひかれる思いでその場を去った。

次の日の放課後、私はもう一度あの場所に行くことにした。今日は中学校が終業式だったから、早く学校が終わった。りようちゃんは、流石にあの場所にはいないだろうと思っただ。「あ、りようちゃん！」私は、鉄棒で遊んでいるりようちゃんを見つけた。学校に通っているのか、通っていないのか、よく分からない。今の時点では、小学校は授業中のはずなのに。「あ、お姉さんだ！」りようちゃんは、クルリと前周りをして駆け寄ってきて、私の手を引いて校門を出る。「え、どこ行くの？ っていうか、学校出ていいの？」「いいの。だって私、あの学校に通っていないんだ

から。お姉さんにちよつと手伝ってもらいたいことがあるんだよ」あの学校に通つてないのに、あの場所にいたのは何故だろう。私がこれを聞いても、「まあいいから、細かい話は、あとあと！」と押し除けられてしまった。それに手伝つてほしいこととはなんだろう。「手伝つてほしいことって何？」と私が聞く前に、いつの間にか私たちは駅に着いていた。「お姉さんに、案内をしてほしいんだよ。この街の」

りょうちゃんは、近くにあつた山積みの街のマップから一枚のマップを取る。小さい子供のキラキラした眼差しを向けられたら、どうしてもしなくてはならない気持ちに駆られた。「いいよ、わかつた。街案内、してあげるよ。じゃあどこから行きたい？」りょうちゃんが地図を見て、「公園から！」と言つたので、まずは駅から近い公園から行くことにした。しかし、りょうちゃんは、公園に着いても地面ばかり気にしていて、周りの遊具や建物に

一切興味を持たない。「何をしているの？」と聞いても、そそくさと周りのものに興味を持つふりをする。その後も、りょうちゃんは、私に何箇所か公園を案内させたが、ずっと地面ばかり見ている。私には地面ばかり見ている理由がわからない。でも、そんなりょうちゃんと公園巡りをしていると、私の心は、だんだんポカポカしてきた。街案内は、六時のチャイムによつて終わりを告げられた。私はこれまで記憶で楽しかつた思い出が少なかつたから、楽しいと時間が経つのは早いと言ふことを、初めて実感した。まだ街の半分ほどしか案内が終わつていない。「お姉さんありがとう！ できれば……。明日も手伝つてもらつていい？」という、りょうちゃんに、私は、「うん、いいよ。」と答えた。今日は、とっても楽しかつたし、また会えるのが楽しみだ、と思ひながら、私は家へ急いだ。

その日を境に、私は、りょうちゃんと過ごす時間が多くなつていた。それはそれで、と

でも嬉しい。私は学校にあまり友達がいなかったからか、りょうちゃんと過ごす時間が宝物のように輝いていると思えた。この生活が幸せだった。りょうちゃんがいる限り、中学校の友達なんか必要ではない、と思えるくらい、りょうちゃんが自分にとって大切な存在になっていた。それも、りょうちゃんが、私が『りょうちゃん』と呼んでいるように、私のことを『りょうちゃん』と呼ばず、『お姉さん』と呼んでくれることが、とても嬉しかった。同じ名前だからという理由で、そう呼んでくれていただけかもしれないが。まるで私たちは姉妹になったようだった。

私は夏休みになってから、ほとんど毎日、暑い太陽が照りつける中、街案内に付き合っ
てあげていた。しかし、明日は、とてつもなく重大なミッションがある日で、私も付き合うことになった。だから、街案内どころではなかったのだった。

いつものように、朝五時に初めてりょう

ちゃんと出会った場所で待ち合わせをした。あくる日、私が、そこに着くと、もうりょうちゃんは先に着いていた。りょうちゃんは、以前アリを守っていた場所の前にしゃがんで、「じゃあ行こうか」と、巢の外に出てきた新しい女王アリに、箱の中に入るように促す。「よし、行こう」箱を持ったりょうちゃんと私は、りょうちゃんのお氣に入りの公園に向かった。公園の中にある涼しそうな草むらの陰に、立ち止まり、りょうちゃんが箱を開ける。新しい女王アリが、のそのそと出てきて、周辺を歩き回り、土に潜っていった。「よし。ミッションコンプリート。あとは新しい女王アリに新しい巢を作って貰えばいいだけ」一応、古い巢ももう一度見に行くことにして、私たちはもう一度小学校へ戻った。りょうちゃん、すごいなあ。アリが苦勞せずに繁殖できるように巢を作る場所を把握してあげるなんて。アリにとってはとても良い都合だろう。私たちが、私の通っている中学校の前

を通っていると、三人の私の同級生の女子が私を見つけた。これまでいじめられていた私のことを、何度も何度も、見て見ぬふりしてきた人たち。「あ、鳴瀬さん！ ヤッホー！」と声をかけてきた。なんでそんなに簡単に声をかけることができるのか、わからない。りようちゃんというからだと思うが、こんなにも幸せな時間を、私の人生を不幸にしてきた者どもに、破壊されてたまるものか。しかし、私とその三人が何か言葉を交わす前に、私の手を取り、りようちゃんがクルッと回って立ち去ろうとした。そして、街案内の時に最初に行った公園、つまり新しい女王アリを連れて行った公園の方へ、急いで引き返していった。ポカンとしている三人を置いて、私はりようちゃんについていくしか選択肢がなかった。

「なんでここへ来たの？ りようちゃん」肩で息をしている私を見て、りようちゃんはベンチに座って、これがこの世の中で最も簡単

なことであるように言った。「お姉さんが、あの三人といるのを嫌がっていると聞いたから」「どうして、私が、嫌がっているとわかったの？」と尋ねる私に、「顔を見たらそんな気がしてきたから」と、りようちゃんは答えた。ものすごく察しがいい。心を見抜かれているようで、少しだけ気味悪い。が、察してくれただおかげで助かった。「察してくれて、ありがとう」そして、ピカーンと豆電球が私の頭の中で点灯した。「ねえ、りようちゃん。小生手相手に、中学生が言うことじゃないけど、相談に乗ってくれる？」面倒くさそう、難しそうという理由で断ると思ったが、りようちゃんは快く引き受けてくれた。「で、相談って何？」とりようちゃんは答えた。私は、これまでのこと、中学校での問題、りようちゃんに出会う最近まで、死にたいと思っていたこと、全てを打ち明けた。心に引つかかっていた何かが、スーッと消えてなくなるようで、軽くなり、話すことをやめられなかった。い

つの間にか、私の目は、とても熱く濡れていた。

「ふうん、なるほど、なるほど……」私が、話終わって少し経ったあと、何も言わなかったりようちゃんが、ようやく口を開いた。「お姉さんってさあ、『一寸の虫にも五分の魂』っていう言葉、知ってる？」私はりようちゃんを見る。急にりようちゃんの口から出てきた言葉に、私はびっくりした。もうそんな言葉を知ってるんだ。賢いなあ、りようちゃんは、と、私は心の中で感心した。「知ってるけど」りようちゃんはため息をつく。「いいよね、人間ってさ。寿命、長いし、自分で自分のことを守れるし、死ぬ原因も少なくて」急にりようちゃんの話は、人間と虫の寿命の話に飛んだ。いつもは輝いている、好奇心旺盛な小さな女の子なのに、今は、真剣な顔で真面目な話をしている。「大丈夫？ りようちゃん」と私が聞くと、「でもね」りようちゃんは、心配する私を無視して話し続ける。「人間っ

ていうのはね、命をあまり深く考えずに生きていると思うんだよ」その言葉がグサツと私に刺さる。私は死にたいと思った自分の心を、りようちゃんに見透かされたように思えた。私は、急に自分が少し前に思っていたことに、恥ずかしさを感じた。でも、流石に言い過ぎではないか。「りようちゃん。世の中には、もう生きるのが辛くて生きたくないと思っている人もいるんだよ」りようちゃんは私を見て、そんなことわかっている、と言うような顔をした。そしてお構いなく、話を続ける。「虫はね、三センチっていう小さな体で生まれて、体の半分の一・五センチの命で、いろんな障害物を避けながら、生きようと一生懸命頑張ってる。それでも、風や雨に飛ばされたり、他の生き物に食べられたりして命を落とすことがある。厳しい環境を生きているのに、それよりも大きな命を持っていて、虫よりもずっと大きい人間が、自分の命を簡単に無駄にしているの？ 生きるのが辛かつ

たら、何か好きなことを見つけるとか、誰かのために生きるとか、なんでもいいから理由やきっかけでも探せばいいじゃない。命なんか一人にひとつしかないのにさあ？ 本当に理不尽だよねえ。厳しいね、神様って。もし私が神様になったら、人間の寿命と虫の寿命を取り替えっこするかなあ。ほら、だって、虫の寿命は短いものと、一日もなくて、長くて十数年でしょ。人間は長いと百年くらい生きれるんだから。そっちの方が、人間だって一生懸命に生きたくなるでしょ？ 虫だって、コロニーや仲間たちのために、思う存分、生きることができるじゃん」

りょうちゃんは、真剣だった。私には、りょうちゃんが怒っているのか、泣いているのか、わからなかった。外見は小学生ぐらいなのに、頭の賢さが中学生以上だ。「でも、人間だって、死にたくて死んでるわけじゃないんだから」と私が呟くと、りょうちゃんは私を見て、ふうん、と呟いて話し続ける。「ほら見

て、お姉さん。私の名前は『蒼時りょう』でしょ？ でもね、これは違う。ただの仮名」りょうちゃんは、近くに落ちていた木の枝を拾って、地面に『あおじりょう』と書いた。そして、その下に矢印を書き、『じょうあり』とかいた。「これはね、文字変えずに文字の順番を変えてるだけ」と微笑を浮かべ、りょうちゃんは得意げに話した。「あなたは人間側なの？ 虫側なの？」と私は驚いて、りょうちゃんに尋ねた。これはおかしい質問だろう。私がこれを聞くと、あははつと、りょうちゃんは笑った。「私は、人間だけど、私には一生この子達を守らなければならない宿命があるの。強いて言えば、私はこのアリさんたちの第二の女王アリってことだよ」私は、驚いて、「なんで第二の女王アリになったの？」と尋ねた。りょうちゃんはこの質問が来るということが、想定済みだったようだ。「この巣ね、見つけたときに、もうちょつとで滅びそうだったから、この巣にいるアリたちが死

ならないように見守ろう、って思ってたね。それが私の今の生きがいなんだ」全く、すごいこと考えるなあ、りょうちゃん。アリに一生を捧げるのか。これからまだまだある人生で、アリを見守ることにしたのか。人生はこれからのに……。私は、感心すると同時に、なんだか、もつたいたいことをしちゃってるなあ、それで本人が満足してるのかな？ と感じた。私は、「りょうちゃんって、一生をアリに捧げることに満足してるの？」と尋ねた。りょうちゃんは私を見た。「私ね、お姉さんに街案内してもらったの。新しい女王アリが生まれて巣を出た時に、一番アリの巣を作るのに最適なところを探してたんだよ。それも楽しくて、アリたちを毎日見守ることも楽しいから、結構、満足してるよ」と笑顔で答えた。街案内の時、新しい女王アリが巣を作れる場所探すために、あんなに地面をずっと見続けていたのか、と理解した。でも、私には、アリのことを毎日考えて、見ている生活が楽

しくて幸せだとは、考えられなかった。

いつものように六時のチャイムによって強制的に家に帰らされた。私は、りょうちゃんと別れて、一人になって考えた。あんな小さい子どもが、アリのために命をかけて、一生を無駄にしてしまうのはもつたいたい。りょうちゃんが、自分で人生を無駄にしているのは、良くないことだと言ったくせに、自分の人生をアリなんかのために、時間を費やして、無駄なんじゃないか、自分が話した話に矛盾している、と私は思った。まだ小学二年生ぐらいで人生はこれからののに、アリばかり見ていてなんだか可哀想に思えた。まだりょうちゃんの将来は、これからなのに。何度考えても「もつたいたい」という言葉しか思いつかない。

私は数日ぶりに頭の中の豆電球が点灯した。夜に、私はカバンに脱脂綿、ピンセット、エタノールを入れた瓶を入れた。次の日、朝早く公園に行った。昨夜入れてきたエタノール

ルを脱脂綿に湿らせて、それをピンセットで、つまんで、りょうちゃんが毎日行ったり来たりしているアリの巣の中に突っ込んだ。遠くから人の足音が聞こえたから、私は、何もしていないふりをして学校へ急いだ。本当は、これをしたくなかった。でも、りょうちゃんの未来を守るためなら、どんなことをしても構わないと思った。けれど、しばらくして、私は、その日、りょうちゃんがこれを見つけたら、どんな反応をするのかを考えると、怖くていてもたってもいられなくなった。

その日は、部活があり、帰る時間になった。私はチラッと公園を見て帰ることにした。公園には誰もおらず、異変が何もなかった。フーツとため息をついて帰ろうとすると、目の前に、私が今日最も恐れていた人物がいた。「ねえ、お姉さん、なんでこんなことしてくれたの？」いくらりょうちゃんが年下だからといって、怒り方が静かでとても怖い。怒られるなら、私は叫ばれた方がまだマシだ。「何

にもしてないよ？ 私」。「じゃあこれは、何だって説明できるの？」「あっ……！」見つけた！ りょうちゃんが持っているのは、空の小さい瓶と脱脂綿。瓶には薄いけど名前が名前ペンで書かれているから、誰がやったのか、犯人がわかったのだろう。表情からは読み取れないが、ものすごく怒っている。「なんでこんなことをしたの？ お姉さん」怖い……。私は、私よりも圧倒的に年下の子どもに怒られているのが、情けなかった。「……だって」「……だって？ だってって、言って済むと思わないで。あれは、私の大切な生きがいだよ？」まるで大人に怒られているようだ。「りょうちゃんの生き方がもつたいたい」と思ったから」と私は、小さな声で必死に理由を伝えようとした。りょうちゃんが侮るような目つきで私のことを見る。「私の生き方がもつたいたい？ 私のために考えてくれてありがとうけど、これは流石にやりすぎだよ、お姉さん。それに、お姉さんの『生きたくない

い』と考える生き方の方が、もったいないと思うんだけど。私は、私のやりたいこと、趣味を生かして、生きているんだよ。人には、人それぞれの生き方っていうものがあるの。まず、お姉さんは、自分が死んだらどうなるかって考えたことある？ 死ぬのはどうかって、考えたことある？」私は、この数ヶ月、毎日『死にたい』と考えていた。私が死んだら、他の人への影響はあるか、私が死んだらみんなどう思うか、などと考えたことはあった。もちろん、家族は悲しむだろう。そして私を死に導いた張本人は、最も後悔するだろう。私は、「考えたこと、あるけど……」「じゃあ、なんで生きようとしらないの？ 家族や友達が、どう思うとか考えたことあるでしょ？ ならどうして、家族や友達を悲しませないようにしたいとか、思わないの？」りようちゃんが、私の言葉を遮って大声で叫ぶ。私がこんなに叫ぶりようちゃんを見たのは、初めて会った時以来だ。「私だって、この巢のアリ

が、私が消えたらどうなるのか、考えたことあるよ。反対に、私の大事な人やものが消えたらどうなるかも考えたことある。そしてね、それが今実現しちゃったよ」りようちゃんがアリの巣を指差す。

私は言葉に表しきれないほどの罪悪感を感じた。「私の今の生きがいつて、女王アリが、次の世代の女王ア리를産んで、その女王アリが雄アリと交尾して、次の家族を新しい巢で作るのを見守ることなの。私は、その女王アリのための新しい巣を見つけないの。だから私、また明日新しい巣を探しにどこかへ行くよ。」そして、りようちゃんは、私が壊したアリの巣をじつと見つめて、ぽつりと言った。「お姉さん、明日の朝、五時にまたこの公園に来てくれる？」ひどいことをした私に怒っているはずのりようちゃんが、また会おうと言ったことに、私は戸惑いながら、「うん、来るよ」と答えた。りようちゃんは、ニコッと笑って、「じゃ、また明日ね」と言った。

約束通り、私は、朝早く起きて五時に公園へ向かった。そこにはベンチに座っているりようちゃんがいて、駅で取った街の案内マップにすごいスピードで鉛筆を走らせている。私に気付いて顔を上げる。「もう今から出発するの?」と尋ねると「うん。もう出発するよ」と、りようちゃんは、大きな黄色のリュックサックを背負って立ち上がった。短パンのポケットに案内マップと鉛筆をしまい込んだ。「あの、りようちゃん……、昨日の件は」と、私が言い出そうとした時、りようちゃんが人差し指を私の目の前に出す。「もうそれ以上言わないで。お姉さんのことは許してあげるけど、三つだけ約束して」えっ? 三つだけ? あんなに酷いことしたのに、三つだけ約束を守れば許されるの? りようちゃんが私を真剣な表情で見ながら指を三本立てる。「二つ目」と言った後に人差し指を折り曲げる。「私と出会ったことは、一生誰にも言わないこと。でも、万が一のことがあった

ら、おとぎ話、噂話くらいで言うこと。二つ目」中指を折り曲げる。「一寸の虫には五分の魂」という言葉を、肝に銘じること。小さな虫にもちゃんと命があるから、故意に殺そうとしたりしないで。三つ目」薬指を折り曲げる。「もう二度と、『死んでもいい、生きたくない』ということを思ったりしないで。つまり、命を簡単に絶対に諦めないことね。この三つをお姉さんが、生きる中で大事にしてほしい」コクリと頷いた私を見て、満足したように言った。「よし。じゃあ、私、行くね」りようちゃんはスタスタと少し歩き、立ち止まって後ろを向く。「じゃあ。バイバイ、お姉さん」と手をふった。別れは寂しい。でも、別れはもう一つの意味を持つ。私は、「また会おうね、りようちゃん」と手を振りかえした。私は、りようちゃんの小さい後ろ姿が見えなくなるまでずっと手を振った。

そしてそのまま学校へ向かった。登校中に、今日が始業式だということに気付いた。

りようちゃんのことばかり考えていて、時間が経った感覚を忘れていたようだった。学校へ行くために、いつもの通学路を通る。はあ、また学校か、とため息をついた。ひとりぼっちで教室へトボトボ歩いていたら、珍しく後ろから声をかけられた。あの問題児か、と思ったが、全く違った。「あの、私、今日転校してきたんだ。佐々木美峰っていうの。よろしくね」その女の子が、手を出して握手を要求してくる。「私は鳴瀬りよう。よろしくね」私は、しっかりとその手を握り返した。学校で新しい友達ができた。それが、何よりも嬉しかった。りようちゃんがなくて、少し寂しくなったけれど、りようちゃんと過ごした日々のおかげで、私は一人で問題に立ち向かえそうな気がした。もう心配することはないと思った。

りようちゃんとの数週間の出来事は、何年経っても私の記憶から消えることはなく、胸に刻まれていた。私は大人になり、ちゃんと

仕事に就くことができ、毎日忙しく過ごしていた。ある日、私は出勤中に公園の前を通った。ここ、りようちゃんのお気に入りの公園だったなあと思っていたら、子供がもめ合っている声がした。どこか懐かしみのある光景だ。必死に何か地面にあるものを守ろうとしている女の子と、それを邪魔しようとしている男の子。私は二人のところまで行つて、しゃがんで、話しかけた。「ねえ、知ってる？ アリをいじめてたらね、それを邪魔しにくる人がいるんだよ。その人も君たちと同じ年ぐらいかなあ」二人の子供はポカンとした顔をしている。知らない人に声をかけられて、言われた最初の言葉がこれだったら、そりゃあびつくりするだろう。何も言わなかったの

で、私は続けた。「私の命の恩人とも言える存在の子だよ。一生懸命、アリの巣を守っていた女の子なんだ」女の子が、ぱあっと顔を輝かせる。「ええっ、お姉さん、その人に会ったことあるの？」と言い、私の話に興味を示

してきた。「俺もなんか気になる！」と、もめ合いを始めた張本人らしき男の子が、ワクワクしている顔をして女の子に続いた。もめ事も忘れて、ワクワクしている少年少女に、私はこれから話す話の主人公のことを考えながら、その話を話してあげたのだった。そして、心の中でつぶやいた。「『万が一』のことがあったら』かあ……。もうなかったらいいけどね」



《最優秀賞》

随想分野

ボールペンの替え芯　Y先生のこと

鯖　読駄

まだもう少しは書けるだろう、と思っていた安易さとは裏腹に、作業の途中で、使っていたボールペンのインクがなくなった。先端のボールからはインクが出ず、その小さな丸だけが運送会社の送り状の上で重く空回りをするばかりだった。面白いことに、複写伝票になっている運送会社の送り状は、二枚目からが筆圧でカーボンが反応して文字が読めるのだった。

慌てて、内線で事務所に、至急ボールペンを、と、連絡をすると、内線に出た事務員は、

使っているボールペンのメーカーを聞いた。透明のボディに白字で小さく印刷されているメーカー名を見て答えると、すぐにその事務員が替え芯を持って来てくれた。

使い捨て的なボールペンが普及して久しく、私もそうしたボールペンの替え芯を替えるのは何年もしていないことだった。経費の節約で、会社が業務用に支給しているボールペンは、替え芯を替えて使って欲しいとのことだった。

六十三歳の私は、昨年から機械工具の会社の倉庫で、商品の荷受や梱包発送の仕事をしている。永年、印刷会社で営業職に従事していたあとの再雇用であることもあって、現役の営業マンだったころのように、安価ではない私物のボールペンを業務で使うこともなくなっている。

近眼鏡を額にずらしあげて、私は、事務員が持って来てくれた新しい替え芯をインクになくなったボールペンの芯と入れ替えた。比

較的安価で使い捨てのボールペンとはいえ、替え芯を新しく入れ替えてみると、なるほど、新品と同じ書き心地で、先端のボールのインクは滑らかだ。事務員の話では、数種類のメーカーのボールペンの替え芯を用意しているとのことだった。ある意味、最近流行のSDGsの模倣なのだろうか、などと思つて、苦笑しつつ……。

催しなどの粗品や記念品、イベントの参加賞などの景品でボールペンを貰うことも少なくなく、また、百円ショップやディスカウントの量販店で安価に売られている事もあつて、ここ何年もボールペンを替え芯を入れ替えて使い続けたことはなくなつたのは、私だけだろうか。

何十年振りにボールペンの芯を入れ替えるという作業をした私は、高校生の時の恩師、Y先生を思い出した。

Y先生とは高校卒業後も、毎年年賀状だけ

はやり取りをしていたのだけれど、ある年、Y先生からの年賀状が元日に届かなかつた。すると、七草粥の話題とともに、遅れた年賀状の配達と一緒に一枚の葉書が配達されていた。それはY先生のご長男からのもので、Y先生が亡くなられていたことをご長男からのその葉書で知つたのだった。もう十年以上前のことだろうか。

Y先生は、私の高校一年生の時の現代国語の教科担任だった。県立高校を定年退職されたあとの再雇用で、私の通っていた私立高校で国語を教えておられた。それは、私が通っていた私立高校からの強い要請によるものだったと聞いたことがある。そうした経緯から、学級担任は持つておられず、他のクラスの副担任であられた。

私がY先生に習つたのは、一年生の時の現代国語だけで、二年生に進級すると、Y先生は違う学年の所属になられた。

その頃、私は十六歳、先生は六十二歳であ

る。父よりも年上、むしろ祖父に近い年齢であられたにもかかわらず、私は現代国語の時間が楽しくてしかたなかった。

教科担任はおろか、学年までY先生と離れてしまった二年生の秋に、私たちの学年は修学旅行で東北と道南を周った。その頃の関西からの高校の修学旅行では比較的遠方で、往路は夜行の寝台車だったけれど、復路は当時としてはまだ修学旅行での利用が珍しかった飛行機だった。

私は、他学年の所属となつて修学旅行に同行出来なかったY先生へのお土産として、青森の十和田湖畔の土産物店でボールペンを買った。私の記憶では二百五十円だったと思う。それは土産物店でよく売られている万年筆型のキャップ式ボールペンで、ボディーにその土地の名所などのイラストが施されているものだった。十和田湖と八甲田山のイラストが描かれていた。

修学旅行から戻り、余韻が冷めないまま授

業が再開された日に、昼休みに私は職員室を訪ねた。

「お帰り、だな。どうだ？ 修学旅行は楽しかったか？」

Y先生は、私の顔を見るとそうおっしゃった。

「先生、これ……」

私は、楽しかったとも言わず、ボールペンを差し出した。

「ん？ これは？」

「お土産……。つまらない物ですが……」

その頃、人に物を渡す時、へりくだつてそういう言い方をするのを覚えたばかりだったように思う。

「それは、それは、ありがとう。饞別も渡していないのに、お土産を買ってくれるなんて、嬉しいことだ……」

破顔というその言葉の通りの笑顔で、Y先生は私からそのボールペンを受け取られた。

私が三年生に進級しても、Y先生は違う学年の所属であったので、教科担任はして頂けてはいなかったけれど、違う学年でありながら、先生も私の進路など、あれこれ気にかけて下さっていた。

そして、高校卒業から四年ほどした時、あの所用で高校を訪ねた。久しぶりのY先生と再会である。職員室で、近況などを報告していると、Y先生は唐突に机の引き出しを開け、「これを覚えているか？」

と、ボールペンを取り出されたのだった。自分でも忘れていた修学旅行のお土産のボールペンである。

「嬉しくてねえ、何度も芯を入れ替えて、ずっと使ってるんだ……」

十和田湖と八甲田山のイラストはほとんど擦れている。

「先生、替え芯って、そんなの、付属品で入ってなかったでしょ？」

観光地の土産物店で売られているボールペ

ンに替え芯など付属しているはずがない。

「同じメーカーの替え芯を買って来てね、ちよつと長いから切ってみたらピッタリ入ったんだ」

Y先生は、そのボールペンのメーカーの替え芯を買い求め、その長いサイズをペン先とは反対の部分の切ってサイズを調整し、私がお土産に買って帰ったボールペンに入れ替えて使ってくださいっていたのだ。

私は感激して言葉が出なかった。出ない言葉の代わりに涙腺が少し緩んだ。

決して高価な筆記用具ではない。観光地の土産物屋で売られているありきたりなボールペンなのに、Y先生はもう五年も使い続けて下さっていたのだ。久しぶりに母校を訪ねた卒業生に、なんと言う贈り物なのだろう。使い古された言葉だけれど、これぞ真の教育者だと思わずにはいられなかった。

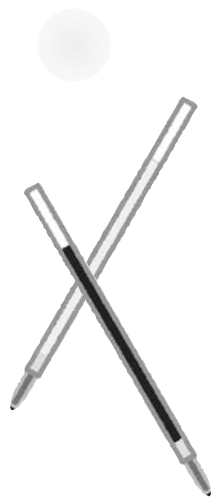
そんなことを思い出し、私の作業の手は止

まっってしまった。

私がお土産として渡した時、先生は六十三歳だった。今の私と同じ年齢である。余計に感慨が深くなった。Y先生の顔を思い出さずにはいられなかった。

業務用備品の経費削減でボールペン替え芯を入れ替えた、という数年ぶりの些事だけれど、私はそんなY先生を思い出し、今さらながら旧師の面影に胸が熱くなり、鼻孔をくすぐり、仕事が手につかず、涙腺の緩みを抑えきれなかった。

私は教員ではないけれど、お土産のボールペンを受け取って下さった時のY先生と同じ年齢である。今の私に、あの時のY先生のような人や物に対する奥深い人間性が少しでもあるかと問われたら、私は、まさに馬齢を重ねただけである事を恥じるしかない。



《優秀賞・一般の部》

随想分野

地獄の底から

片岡 紘

私は、現在通っている高校とは別の高校に十五歳で入学し、十五歳で退学しました。その高校では一単位も取っていません。

また、今の高校に入学した時点で既に二十歳を迎えており、三年次の今年二十三歳を迎えます。

このことから分かるように、私は他の高校生と比べて年上で、早い話、周りの生徒からすればオッサンという事になります。また、私は性格も内気で、あまり人付き合いに積極的な方ではありません。そんな事情が相まっ

て入学当初は他の生徒とうまくやっていけるか、とても心配していました。そして、その心配は的中してしまいました。

周囲との年齢差から自分が明らかに浮いていると勝手に思ってしまった、一年次の時は学校を休みがちになり、ほとんど授業に出席できずにいました。しかし出席できなかった理由は自分の年齢だけではありません。

私の両親は私が十八歳の頃に離婚しています。私が今の高校に入学する二年ほど前のことです。その際、私は母親について行き、地元から少し離れた場所でアパートを借りて母親と二人で暮らしていました。

暮らし始めてひと月ほどしたとき、私が母親に「一日中お酒を飲んでいる」と注意した事がきっかけで、母と口論になってしまいました。もう母親とは話をしても仕方ないと思い、私はそのままアパートを出て父親のいる家に戻りました。

そこから父親との二人暮らしが始まりました。

た。私はスーパーのアルバイトに励みつつ、仕事で夜遅い父親に代わって家事をこなしていました。また、父親に行けと言われて、正直憎んでおり、あまり会いたくなかった母親のアパートにも時々行っていました。

一人で暮らすようになった母は、もともと大酒飲みだったのが日に日に酒の量が増えていき、アルコールが原因で肝硬変になり、幻覚や幻聴、記憶障害なども起こって誰が誰だか分からなくなってしまう、入退院を繰り返したものの、酒の量は一向に衰えず、医者や私たち家族、その他の身内から止められているにも関わらず、そんな心配はお構いなしに飲み続けていました。

そしてとうとう医者から私だけが呼び出されて「あと二年くらいの命だと思ってください」と告げられました。その言葉を聞いた時、あれだけ母の事を憎んでいた自分がとても情けなく思え、それと同時にとても後悔しました。あの時俺がもっとちゃんと酒を控えるよ

うに言っていれば、あの時アパートから出て行かなければ、こんなことにはならなかったはず。そんな後悔の念が頭の中をグルグルと回っていました。

そんなこんなで月日が巡り、とうとう母に最期の時が来てしまいました。病室のベッドで横たわる母の遺体を見て私の後悔の念はさらに大きなものになりました。そしてその後悔の先に、ある考えが出てきました。それは、「俺が母を殺したんじゃないか。私が母を追いつめてしまい、母は酒に逃げるしかなかったのではないか」ということです。正直、母の死の原因が自分にあると考えると、気が気ではありませんでした。

母が亡くなったのは、私が今の高校に入る半年前のことでした。そんな精神状態で高校に入学すれば、さらに地獄を見るのはわかっていたのですが、父からは「高校だけは絶対に行つといたほうがええ」と常に言われていたため、苦勞するのは覚悟の上で今の高校へ

の入学を決意しました。

しかし、やはり入学当初の出席状況は最初に話した通りの悲惨なものでした。一年次の間はそんな学校生活がズルズルと続き、あまり登校していなかったたので他の生徒との接点もあまりありませんでした。

気が付いたときにはもう二年次としての生活が始まろうとしていました。このままでいいはずがない。多くの身内に助けていただし、苦勞して今の高校に入学したにもかかわらずこんな結果では、力になってくれた方々を裏切ることになるし、自身の努力も水の泡になってしまふ。そして何よりこのままではあの世で見てくれている母親に合わせる顔がない。

そう思った私は、自分自身に「お前は死人にまで心配をかけさず気か？」と言い聞かせ、二年次の生活がスタートするにあたり、自分に何ができるか真剣に考えました。

私は、それまでクラスの委員などにはなら

なかったのですが、ここで自分を変えようと決意し、クラス委員に立候補しました。内気な私に出来るのかと思っていましたが、勇気を出してクラスの人に意見を聞いてみたところ、意外と親切に話してくれました。入学当初は自分自身で壁を作ってしまったのではないかと後悔しました。また、その壁がなくなったことで他の生徒との交流も深まり、学校に通うのが楽しくなってきました。結果的に、二年次では自然と欠席が激減しました。しかし、時には学校に来るのがしんどいと感じることもありました。そんな時は自分自身を奮い立たせる言葉を頭の中に思い浮かべ、「ええ加減諦めろ、所詮お前はそんなもんや」「やるだけ無駄や、アカン奴はどこまで行ってもアカン」そんな言葉を頭の中に並べ、自分の反抗心を煽って自分自身を鼓舞することで、なんとか二年次を乗り切ることができました。

現在、私は三年次で次の三月で卒業予定です

す。無事卒業できそうなのは、二年次が始まる時に自分自身を変えようと決意し、決意したことを実行したおかげだと思えます。また、しんどい時に自分自身を鼓舞したおかげだと思えます。

これから卒業して、社会に出ると、色々な人との出会いがあると思えます。そのとき、今の高校で学んだように、自分から壁を作らず、周りの人々とのつながりを大切にしていきたいです。また、その周囲の人と接するとき、悪い面ではなく、良い面に目を向けられる人になりたいと思えます。なぜなら、一時は悪い面しか見えなかった母親の良い部分が、亡くなった時を境に一気に見えるようになった経験があるからです。今となつては、このことに気付かせてくれた母には感謝しかありません。

最後に、あの世から見えてくれているだろう母親に言いたいことがあります。

「お袋、生きるときは色々面倒かけてすま

んかったな。今俺は楽しい高校生活を送ってる。これから先、色々と厄介事にぶち当たってもしれんけど、心配せんとそっちで俺のこゝと見守ったってくれ。お袋、長い間、ホンマにお疲れさん。ありがとうよ。」



《優秀賞・学齡児童生徒の部》

詩分野

こころおと

ひ
な

きつと 心には 音がある

心には 音楽がある

やさしい音 元気な音

さびしげな音 かたい音

全部 大事な 自分だけの音

話していて

気が合うと思った相手がいるなら

それは

心の和音が 合っているということ

でも

和音が くずれる 相手もいる

忘れないでほしいことは

相手にも 心の音が あるということ

無理に 相手の音を 尊重しすぎても

しなさすぎても だめ

山あり 谷あり

こころおとは おたがいを ささえあつて

一つの音楽をつくる

それができるから



動
画
部
門

イ
ラ
ス
ト
部
門

動画・イラスト部門別審査講評

【動画部門】

審査委員 山本 剛大・篠原 嘉一

《審査総評》

学校やネットでのいじめ、偏見、考え方や気持ちの押しつけなど、身近に起こりうる人権問題に正面から向き合った、意欲的な作品が多かったです。繊細な心の動きを描き、経験を通じて見つけた解決策を訴えかける率直な作品が多く、制作した皆さんがなぜそのテーマを選んだのか、ストーリーは実際に経験したものか創作したものかなど、いろんな話を聞いてみたくなりました。動画で物語を描きながら、それを通じてメッセージを正しく届けるのは実に難しい作業です。主題は何か、何をどのように訴えるか、ねらいを定めることが重要です。そして、短い動画だからこそ構成を十分に検討し、時間配分や、映像・音声の演出などを考えて、複数の人で試写を繰り返しながら「伝わる動画」に育てていくことが大事です。見る人・受け手の気持ちを想像し、丁寧に作り上げていく作業は、実は人権を尊重する姿勢と通じるものがあるのでは、と皆さんの力作を見ながら感じました。

【イラスト部門】

審査委員 古巻 和芳

《審査総評》

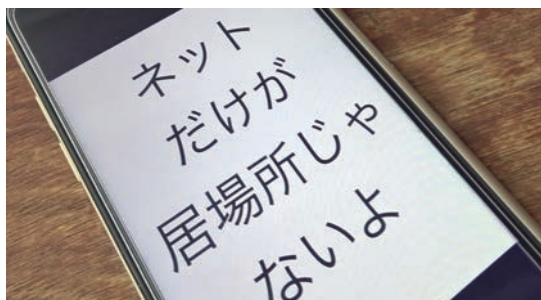
若い応募者のみずみずしい感性による力作が印象に残りました。多くの描き手が、自分の身の回りで想像しうる人権問題の態様について、構想を膨らませ、考えを巡らせたこと自体が、貴重な経

験であり、本事業の趣旨にも沿ったものだと言えます。

最優秀賞の「星空のもと、人類平等」は、「人類共通の財産である『星空』のもとでは、すべての人類が平等である」という着想のメッセージ性がまず優れています。作者は県立舞子高等学校の天文気象部ということですが、平素のクラブ活動の向こうに人類普遍の価値を見出していたののだろうか。だとすれば、素晴らしい教育の成果です。作品は、素直にそれを視覚化できており、最優秀に選びました。その他の3作品も、いずれも人の優しさや思いやりといった、目に見えない価値を形として表現するために様々な工夫を凝らしており、いずれも審査をしていて、暖かい気持ちを受け取った思いがしています。

動 画 部 門

最優秀賞



↑受賞動画全作品
はコチラからご覧
になれます。

「私の居場所」 チームR (県立伊丹北高等学校)

講評：「暗い世界」→「転換のきっかけ」→「気づき」と、構成がよく練られています。カメラワークや映像制作、選曲、ナレーションも十分に工夫されていて、最後はすがすがしさを感じます。ネットの書き込みを鵜呑みにせず、リアルな関係を築く大切さが伝わってきます。

優秀賞



「偏見のない社会へ」

兵庫県立龍野高等学校放送部B班 (県立龍野高等学校)

講評：人の属性や性質、特徴などによって「きっとこうに違いない」と決めつけることは起こりがちですが、それが間違っているおそれがあるというメッセージが伝わってきます。「知らないこと」「理解していないこと」が人を傷つけるという気づきが、よく描かれています。



「1つの勇気」

チームS (県立伊丹北高等学校)

講評：いじめが起きる背景に注目し、「本当はこうあるべき」「こうしたい」という思いと現実との狭間で感じる迷いや戸惑い、ためらいがよく描かれています。次のステップを踏み出す勇気の大切さがよりいっそう伝わるよう工夫すると、前向きな作品に仕上がったと思います。

イラスト部門

最優秀賞



「星空のもと、人類平等」

天文気象部

(県立舞子高等学校)

講評:「人類共通の財産である『星空』のもとでは、すべての人類が平等である」という着想のメッセージ性が特に優れており、素直にそれを視覚化できています。

優秀賞



「幸せと悲しみの共有」

山口 美咲

(県立明石高等学校)

講評: 弱者に寄り添う優しい姿勢が分りやすく丁寧に表現されています。絵としての完成度も高いです。

令和6年度

『HYOGOヒューマンライツ
作品コンテスト』

発行
編集

令和6年12月

公益財団法人兵庫県人権啓発協会

〒650-0003

神戸市中央区山本通4丁目22番15号

兵庫県立のじぎく会館内

TEL 078 (242) 5355

FAX 078 (242) 5360

発行者

兵庫 公益財団法人兵庫県人権啓発協会

印刷

(株)服部プロセス

